エト 4P 84

271-37

エ、エル、ハウ孃略傳

エ、エル、ハウ孃は合衆國「マサツチユセツチユ」州「ボストン」府に生れ「イリノイズ」州「クリフトン」の村立小學校に入り普通教育を受け、同州「ラックフォード」に在る「ラックフォード」カレッジに入り二ヶ年の勉學を以て音樂科を卒業し、後「シカゴ」府に於ける諸私立學校にて勉學中或る「ボストン」學校の通信教授を受く、後「シカゴ」府の「ミセス、バツナム」氏に從ひ幼稚園の理論及實地の研究をなす、後「シカゴ」府に於て私立幼稚園を開き三年間之に從事し次で「ミス、グ

ランド」氏の學校に聘せられて幼稚園教育に從事すること六年、次で日本に來り神戸頌榮幼稚園及保姆傳習學校を管理すること十三年なり、明治三十三年文部省より傳習所教員の認可を受け又兵庫縣廳より傳習所長及頌榮幼稚園長の認可を受く、

エ、ヂル、ハウ孃保育法講義錄

本書は明治三十六年八月私立岡山縣教育會開催の夏期講習會に於ける講話を筆記せるものなり

第一講　萬國幼稚園の歴史

現時、此日本があらゆる教育の方面に於て進歩せる事の著しき事よ、教育者諸君が如何に兒童教育に就き苦心せられつゝある事よ、即ち諸君が教育の研究の必要を感ぜられ、かゝる炎天の候をも厭はず、斯る準備を爲し、かくも多數の方々が御出席になつた、其御熱心の深きを見て、私は大に斯道の爲め喜ぶと、同時に私は同情を以て御話するのであります、然しながら、其十日間の私の話は、或は餘り興味を感じない事かも計られぬ、つまり面白いと云ふよりは、寧ろ難いと云ふ方であります。即ち廣く保育上の原理を拔き出して、且つ廣く各國幼稚園の一般に就き現時の有樣を談じて、聊か諸君の御參考に供する心構である。是は獨り保育の事のみならず、廣く教育の事にせよ、總ての事は一國一地方の狹き研究よりか、廣く各國に渉りて、所謂、比論的研究と云ふ事が最も利益ある方法と信じます。然しどうも日本の方には餘り仕事が多きに失すると云ふ傾があります。諸君にしても、此折角の休暇の事であるから、此處の講習を了りて、さて御歸宅の後は、晝寢なりと何なりと、そこは御隨意、兎に角充分に身心の御疲勞を休養あらん事を願つて置きます。扨て爰に大部の書物を持參しましたが、決して之を講讀するのではないから、御心配は御無用である。三年程前に東京で宣教師の集りがあつて、其時私が保育上の事に就き書いたものが有りますけれど、其書いたものが今日の間に合はないですが、然し其事柄は此書物の中にあるのですから、此中から彼れ是れ拔き出して、御話をする考であります。

先づ話の順序として、彼の幼稚園の創立者たる「フレーベル」氏の御話を致しますが、今此黑板に書いた、

「ヲポバイスバーク」「カイルホー」「ブランケンボール」「グリースハイム」「マリーエンタール」此、五つの獨逸語は「フレーベル」氏の生涯の歴史に關係ある語であるから、充分御記憶を願ひます。先づ此「ヲポバイスバーク」と云へる語は、白き小河と云ふ事で、即ちフ氏が初めて產聲をあげた處で、誠に哀れなる子供の境涯を送つた處である。夫れより氏は、成長すると共に種々なる學科を學び、色々なる事業を試みたが、何れも失敗に了りて、一も己の志を得るものとては無かつたが、二十三歳の時、或學校の敎師となり、爰に氏は始めて適當の地位を得たるを信じ、大に愉快を感じた。其後、氏は「グリースハイム」に居を定めて、一學校を開設したが、後友人「ランゲタール」氏の協力を得て「カイルホウ」に移り、數年の間困難に困難を極め、金は無し、實に貧乏の極度であつたが、此學校は一時は盛大なりしも、氏の經濟が不得手であつた爲め、暫時の間に衰微を來し、遂に閉校するの不運に立ち至りました。夫れより氏は瑞西の「ブルグドルフ」に於て、斷然幼稚の敎育に身を委ぬるの一大愉快を覺えたが、此時の氏の喜は、恰も諸君が萬歳と云ふ語を以て表はすが如きの喜と希望とを以て起つたのである、此フ氏の溢れ出づる熱心は、「ブランケンボルグ」の地に於て實行を見るに至つたのであります、即ち爰に始めて幼稚園を創設して、廣く保育の必要と方法とを、或は新聞に揭げ、又は自ら諸方に往きて演說も爲ましたが、何分資金缺乏の爲め、又此設計も僅に二年で閉園する事となつた、依りて氏は落膽して、再び「カイルホウ」に歸りましたが、然る處、「リビンスタイン」と云ふ溫泉場で、「ターレンホルツ」男爵夫人に遇ひ、此方の厚き信用を得て、遂に此方より他の貴族方に紹介して、貴族方は皆「フレーベル」氏の事業を贊成し、手厚き同情を以て、事業を助けることゝなつた。即ち此方々の助力に由りて「マリーエンタール」とて、宏大なる建物と、廣き庭と、多くの費用とを借りて、保育敎師養成の事を始め、若年の婦人だちを集めて、模範的の敎授を爲し、爰に氏が生涯の望を達するの幸運に至りましたが、遂に氏は此喜の中に此地にて歿したのであります。(此時ハウ孃は立ちて黑板の五ツの獨逸語を唱へて一々講習員に合唱せしむ)

扨て、フ氏の一生涯を達觀するに、殆ど總ての事が失敗に失敗を重ねて、初は多くの人の輕蔑を受け、非難せられ、つゝある間に、其事業は進步したのである。即ちフ氏は如何に反對あるも、非難あるも、毫も意に介せず、益々鋭意熱心、遂に事業の發達を遂げ、生涯の目的を達したのであります。此一事は宜しく諸君の御注意を乞ふところである。フ氏が今より四十餘年前「リビンスタイン」で子供を相手に或は山に登り、野に歌ひしに、時是れ夏の頃とて、此溫泉に浴する數多の浴客は、此子供を相手に遊戯に餘念なき此老人を見て、或は狂氣人よ、馬鹿者よと頻に嘲笑したが、中に「バンビロー」といへる人丈は深くフ氏の熱心に感じて、言ふには、今彼を見て狂氣人よ鹿馬者よと嘲弄せる者も、今幾年を出でずして、彼の人の爲め紀念碑を建つるに至るを知らずやと豫言したそーである。扨てフ氏が、かく諸人に愚と嘲けられ、狂と笑はれ、遂には學校の敎師だちも、フ氏の保育法に反對し、其他寺院の僧侶も反對し、はては政府も幼稚園廢すべしと云ふ法令さへ發布するといふ悲境に陷つたが、其後、六十年の今日に於て、フ氏の爲め五つの紀念碑は立派に建てられ、尙其事業は世界各國に普及する事となつた。

次に各國幼稚園現時の有樣の大畧を御話しますが、日耳曼では、殆ど幼稚園の設立を見ぬ處とては無い、且つ保姆の敎育所も設けられてある。瑞西に於ては、或地方の如き、幼稚園のみの事業に二萬四千圓を費して居る。又保育に從事して居る先生は二萬二千人程もあります。白耳義も又、是れと同樣であります、佛蘭西は他國に比較すると、少しく幼稚園の設立は少數ではあるが、これとても漸次增設の狀である。伊太利ではフ氏の原理主義により、盛に幼兒を保育して居る、師範學校等にも傳習所と云ふものゝ設もあり、猶保姆等の集りなる婦人會と云ふ會があつて、政府より二萬圓の補助を受けて居ります、英吉利の如きは如何と云ふに、幼稚園は非常に進步發達して保育に關する書物雜誌も多く發行せられて居る、或地方などには一個の建物に對して、十萬圓の巨額なる費用を投して居る、次にフ氏が幼稚園事業の發展進步を見る事に於て、最も適して居るは米國であると言はれたが、實に其言の如く、現に今日に於ては、何處迄も幼稚園が設けられ、

且つ其他、諸雜誌、書物も續々出版になつて居る、御承知の如く米國は諸方の人民が入り込みたる國で、伊太利人もあれば、葡萄牙人も居るといふやうに、諸國の國民が入り込みて居る、現に「シカゴ」市の如き四萬人の「ボヘミヤ」人が住で居る、然して此等、移住民の多數は無智、無教育の劣等、人民である、此等の無智の人民を何に由りて改良進化せしむるかと云へば、卽ち幼稚園保育の力に由りて彼等劣等人種の精神を改造するより他に良案はないのであります。布哇の幼稚園の如きは英國の子供も日本、支那、葡國、米國の子供も其他種々なる人種が同一の幼稚園に於て、保育を受けて居る、又、今より十年前、南米より合衆國に向ひ、保姆を養成する爲めに教師を送りくれとの請求があつたので、合衆國には其要求の教師を送り、現に南米の保姆養成所に於て事業に從事して居ります、扨て此日本は早くより、幼稚園事業に着眼せられ、其設立は勿論、其他、恩物、遊戯、唱歌等に至る迄、大に研究を遂げられ、是に關する書物の發行もあり、保姆養成の途も設けられて居ります事は諸君も御承知の事である、次に支那は單に宣教師の手に於て、漸く幼稚園的の事業を遺つて居る、又印度の如きは大抵の公立學校には幼稚園の設けがあつて、盛にフ氏の原理を應用して居る、土耳古は漸く宣教師の手にて出來て居る、其他南亞弗利加より「マルクルニシア」島に至る迄、殆ど幼稚園の設立を見るに至つた。

扨て、六十年前に馬鹿よ、狂氣よと嘲笑せられし、フ氏の原理は獨逸を基點とし、漸次各處に傳布して、遂に全地球を一週して、其事業は各處に活動しつゝあります、然して其傳布せる各地にては、政府も教育家も慈善家も皆氏の事業を採用し、其原理を應用して、それぞれ成功して居る、然して單に世界に幼稚園其物の設けられしに止まらず一般教育の事業に對し、如何に補益を與へしか、如何に幾千の會合がフ氏の原理を應用せる事か、尙世の母たちが我子を育つる上に於て、如何に偉大なる感化を與へしか、フ氏の指導に基き、如何に必要なる多くの書物が出版せられしかは、多言を用ひずして明なり。米國にては保姆の教育を受けたるものが、今や教育の事業の上に最も良好なる成績を奏して居ります、嗚呼「フレーベル」氏の功績、眞に偉大ではありませぬか。最後にフ氏の事業に就き二三の解釋を擧ぐれは、先づ幼稚教育の必要と各教育の段階は必ず聯合して行かねばならぬと云ふ事である。扨て前の考より一般教育と云ふ事に就き言へば、凡そ何れの國も大學校とか高等學校とか云ふて、高等教育を施す爲めには、建物も立派で、費用も多きを惜まぬが、幼稚園の如き初等教育の爲めには、是れと全く反對といふ風である、然し「フレーベル」氏は人間は最、幼少の時に於て、善美なる教育を施すべしと言つたが、此フ氏の感化は、今日に及ぼして、上に言つた事を轉倒するに至りしが如き感を與へました。

最後に一寸「シカゴ」の大學校の狀を申しませう「シカゴ」では二三年以前に幼稚園を初め小學校より大學校に至る迄を連絡し、卽ち八歲より十六歲迄の生徒を教育するが爲めに、參拾萬圓の費用を投して、校舍を起し、年々拾八萬圓を費して統一的教育を施して居る。

第二講　米國にある幼稚園の今日の有樣

今日は米國の幼稚園が如何に進歩しつゝあるかと云ふ事に就き、御話を致しますが、扨て米國では、幼稚園事業に就き二個の奇妙なる點がある。其一つは幼稚園、其他、教育の事業が多くは婦人の手にて出來て居て、且つ其進歩が著しく良い事と。今一つは私立が先づよき結果をあげると其狀を公立の方に於て認め、遂に其進歩發達が公立に及ぼすといふの狀である事とであります。簡單に言へば總て教育は婦人の手にて進歩することゝ、何事も私立が先きで公立が後と云ふ狀であります。今、爰に各地で最も初めに幼稚園を起した方の名を掲げませう。

「ボストン」にては「ヒボデ女」。「ニウヨーク」にては「クラウス」夫人。「セントルイス」にては「ブロー」女。「シカゴ」にては「ハッナス」女でありました。「ボストン」で始めて幼稚園を起されたのは此「ヒボデ」女であります。又此「クラウス」夫人は初め日耳曼に於て保育の原理を修め、歸りて此「ニウヨーク」に於て始めて幼稚

の保育に從事せられた方であります。又次の「ブロー」女は、餘程、金滿家の令孃であつたが、自分が幼兒敎育の必要を感じて居られました際、前の「クラウス」夫人に出遇ひまして、同夫人より色々保育上の話を聞いて、爰に一層保育の貴重なる所以を感じ、遂に時の文部大臣「ダビルテーハルス」氏に意見を御話になつたところが、同氏も非常に事業の貴重なる事を賛成あつて、遂には其助力に由りて「セントルイス」に幼稚園を建設する事となつたのであります又此「ハッナス」女も既に三十年前に於て「フレーベル」の主義を賛成せられ、遂に「シカゴ」に幼稚園を起されました方で、私などは此「ハッナス」女に就きて保育的の敎育を受けたのであります。然し「ハッナス」女も始めは私立の幼稚園でやつて居られましたが、其結果の著しきところから、遂には公立學校等に紹介する事となつたのであります、今此處に米國幼稚園の數を揭げますれば、先づ公立の幼稚園が一千八百十五、私立が二千九百九十八、合計四千八百十三園あります。又保姆の概數が公立が三千三百二十六人で、私立のが六千四百五人、合計九千七百三十一人であります。又其園兒の數は公立が十三萬一千六百五十七人、私立の方が九万三千七百三十七人、合計二十二万五千三百九十四人といふ概數を現はして居ます。然して、其建物も日本の如きはないです。大抵一個の校舍を何人もして用ひて居る、されども其構造は頗る大きくて、天井も高く、光線も充分で、其他、何彼の設備が便利に出來て居る。そして私立は一園の園兒も餘り多數と云ふ方ではないが、公立の方は大抵多數の園兒を一堂に集めて居る。是れは日本と同じく經費が許さぬ故、止むを得ず斯くやつて居るのであります。

扨て、又あちらでは幼稚園の設立に三つの組織がある。卽ち一は女子のみで私立でして居るのと、公立でやつて居るのと、又男女に抱らず皆共同して會社を作り、其金を以て貧民的幼稚園を設けて居る處も方々にあります。今其一例を御話しますと、或地方では有志者慈善家が四萬弗の金を積み、是れを以て一の幼稚園を建設せる處もあります又或地方では矢張有志者が八萬弗の金を出費し之れを銀行に預け、其利子を以て幼稚園を維持して行くといふ如く出來て居る處もある、又或市では母の紀念の爲め、六萬弗を寄附して幼稚園を設けて居る處もあります、扨て私がかゝる例を引きて御話をしまするのは、前にも申します如く、一般に高等の敎育の爲めには建物も立派で經費も多分であるが、幼稚園の如き初步の敎育の爲めには餘り是等の事を顧みぬ傾きがある。是れは大なる誤謬であつて、高等の敎育よりか、却て初步の敎育に重きを置かねばならぬと云ふ考から、米國などでは幼稚園の爲め、斯く諸人が注意をするやうになつて居ると云ふ事を御話したのであります。其外、保姆の養成所も三十五校程あつて、今其中の或學校の現況を御話しますと、其生徒數が大抵百人より百二十人あつて、是れに入校する生徒は年齡二十五歲以上で、學力、体力、共に充分なる者、卽ち高等學校卒業の者、或は是れに相當せる學力を有する者に就き、試驗の上、入學を許すといふ規定であります。然して其修業年限は二ヶ年のも三ヶ年のも四ヶ年のもある。猶、其研究すべき學科目は、先づ其重もなる者が、敎育、恩物、手藝、保育、理科、美術、体操、音樂「フレーベル」氏の原理、とでありますそして他日此學校を卒業して公立の幼稚園に職を奉ずる事となりましたら、又再び困難なる試驗を受けねばならぬ事になつて居る。そして此試驗も濟んで、愈、奉職する事となつて、さて其後は勉强を止むるかと云へば、決してそうでない、或は一週間に一度とか、一ヶ月に三度とか必ず幼稚園保姆倶樂部に出席して、保育に關する談話を聞くとか、或は保育上の書物雜誌に付、色々研究するのであります。今何處の幼稚園にも母の會と云ふものが設けられて、世の母親たる者が時々會合して、子供を養育する事に就き研究するのである。其外、年に一回は保姆聯合會を開きて保育上の問題に就き、互に研究する事となつて居る。然して、其會員の中より時々派出員を選びて、歐洲各國へ派遣し各國保育の狀況を視察せしめます。扨て斯ういふ有樣で、保姆が絕へず勉强を止めぬと云ふ事が、今日合衆國の幼稚園事業の進步しつゝある原因となつて居ると云ふ事を斷言する事が出來るのであります。

次に又幼稚園に係はる役員に四の階級がある、先づ學務課長で次は園長次は主任保姆、助手であります。又「シカゴ」などでは八十位の公立の幼稚園中に於て其中の一人の保姆を推して、他の幼稚園の監督者として、

己れの幼稚園のみならず、八十の幼稚園を時々巡視して、其保育の狀況を視察する如き組織となつて居る。其他、園長は諸君方のやうに一園を管理して保育をやつて居る事は同樣である。又其保姆の俸給は各地多少の差がありますが、先づ「カリホルニヤ」では年俸最低が五百五十九弗より最高が七百二十弗「シカゴ」市では最低が五百弗より最高が七百弗「ボストン」では最低が六百弗で最高が七百二十弗であります、又「セントルイス」では最低が五百二十五弗から最高が七百弗に至つて居る「ニューヨーク」では六百八十一弗にして最高は無限である。又「フヰラデルフヰア」では最低が四百弗より最高が四百七十弗であります。さて、此俸給を日本の貨幣に直すと、殆ど二倍となる。然し、保姆は斯る俸給であるが。助手は保姆より少しく俸給が下だつて居る。然し、保姆養成學校の敎師になりましては、千八百弗より二千弗まで位の待遇を受けて居ります。扨て、斯く御話すると、非常に俸給が多きかのやうに聞えますが此日本など〻比較して餘り大差はないのです。なぜなればあちらは諸物價が高價で、卽ち生活の程度が高いから、比較的に優待のやうに見へるのみで、其實際は左まで高給と云ふのではありませぬ、猶やはり日本の如く普通の小學校の先生だちよりは少ないのであります。然し近來は漸次增俸の傾向があります。故に米國一般の輿論は小學校よりか幼稚園保育が位地は高貴であると云ふの狀であります。

次には米國の凡ての人が如何に幼稚園の爲めに同情を持ちて居るかといふ事に就き、あちらの景況を話しませう。諸君も御承知の如く、米國は一州一州で政事が違つて居るから、小學校でも幼稚園でも其州、其州に由りて多少、勝手に方針を定めるといふことも出來る。そこで「シカゴ」の學務課長が高等敎育にのみ偏して幼稚園の如き初等敎育は毫も眼中に置かぬ方針の方であつたが。折しも經費多端に際し、遂に幼稚園を廢して是れに要せし費用を高等敎育に轉用せんとしたが、ところが「シカゴ」の重だちたる方々、其他一般の市民が大に激昂し、彼處、此處に集會を開き遂に一致の意見として、幼稚園廢す可らずとの建議を議會に提出して、議會は是を容れたので、再び幼稚園を持續する事となつた。昨年の春も現任文部大臣「ダブルハイン」氏が、萬

國聯合保育會の席上に於て一場の演說をなしたが、其演說の要領は、實に幼稚園敎育は一國の文明を進步せしむる基礎であつて、彼等園兒が他日大學に於て學ぶべき大智識の萠芽であると言はれました。それで此聯合會は非常に盛大な會で且つ有益であると云ふ證據には、方々の市長より、當年は私の市、來年は我市と云ふが如く、各市競爭して會の開設を歡迎するぐらゐであります。そして本會が如何なる働をなすかと言へば方々よりの提出問題に就き、研究討議の末、其輿論を採るのである。今其問題の二三を申しますと、(一)幼稚園の恩物は如何。(二)噺と遊戯と唱歌は如何に活用すべきぞ。(三)理科の智識は如何にして端緒をとくか。(四)畫寫眞の使用法は如何。(五)黑板は如何に使用すべきぞ。(六)自在畫彩色は如何に課すべきぞ。(七)園兒の組合せ方は如何にすべきかといふやうなる問題であります。

先づ、恩物を使ふには、極、幼年組に自由に觀察せしめて遊ぶ。年長組には口授に由りてやらする。又、恩物をどれだけ用ふるかと云ふ事に就き、二十の幼稚園中四は悉く用ふるといひ、後の十六園は隨意に擇びて用ふるといふ事である。今恩物の二三を言ひますと、先づ積木、粘土、砂、自由畫、彩色畫、自由の切紙、疊み紙、自然物、竹細工等であります。

又話は極、困難であるが、中でも歷史、傳記、神話と天然物の話などは難かしい、然し、それも保姆、其人の技量如何に由ります、隨分むつかしき話も話しやうでは易く聞かしむる事もできます、又自然物の如きは兒童をして庭より採集し來らしめて觀察をやらします。右に附隨して一言、皆さんの御注意を乞ふ事があります、そは皆さん方がよくおやりになる。彼の梨、桃の模造品を一個のみ、手に持ちて是は何でありますかと云ふてやるのは、宜しくないと思ひます。必ず模造品に由らず、得らるゝ限りは、實物を各兒に一個宛、與ふるがよろしい、夫れ故あちらの幼稚園には廣き庭園がないから、窓の下へ箱を設けて、是れで種々の花卉植物を作つて居ります、序でに敎室の模樣を御話しますが、室內は餘程、美的に設備ができて居ます。窓も高く、光線も充分で、立派な窓掛もあり、敷物も奇麗で、植木もあれば「ピアノ」も設けてあり、鳥も籠で

飼ふてあれば、魚も泳ひで居る、又最も佳なる繪畫、寫眞も多く懸けてあつて、頗る美麗に飾りてあります、皆さんの幼稚園でも畫をお懸けになるならば、日本畫、洋畫に論なく、最も勝れたる美妙なるものをお懸けになる事に御注意を願ひます。

次には、黑板の使用法の事ですが、黑板は巧に利用すると、否とに由りては、大に保育上の成績を異にします、卽ち私が今皆さんに御話するにも、單に空談でなく、斯うやつて黑板に掲げて御話すると、よほど便利であります、今一つ園兒の前にて、黑板に魚か鳥かを畫いて、御覽、彼等は屹度此れに心を奪はれ、彼等の視線は是に集まるでせう、是れを以て考ふるも黑板が如何に價値あるかは判ります。

第三講　母之本

（イ）一般の目的　（ロ）米國にての用方　（ハ）社會的と智育及德育の爲に用ゆる礎

私は今こゝに母の本を持ち參りましたが、此書物は米國の幼稚園では、大抵用ゐて居ます。爰に獨逸の原書もあります。英國の譯書もあります。扨て此母の本は、私が八年前翻譯したのですが、其時原書の繪を日本風の繪に改訂したが私は斯道先輩、諸氏より或は呵りを受けはしないか、私の毛を一本も餘さず拔れはしないかと、非常に恐を懷いて居ましたが、其後、本書が出來あがりて、彼の人々に見せましたところが、なか〳〵毛を拔かるゝどころではなく、非常に賞美を得ました、私はそれで大に安心しましたのであります。然して此母の本の目的は何であるかと云へば、無論遊戯といふ事である、卽ち子供の敎育てふ者は、決して文字に始まるものでも無い、單に遊と云ふ事に始まるものである。最も始の敎育は母と子供と共に遊ぶと云ふ事に起る。其故に「フレーベル」氏は此點に注意して、母と子の家に就きて充分に觀察して、是が確に敎育の基點であると認めた、然し其敎育が單に本能的に行はれて居るのであるから、或は間違がある。「フレーベル」氏は此點に注意して、其誤を正し、一般世の母たる者が子供と遊ぶ正しき眞理を氏の洞察力を以て、先づ母の本の筆頭に書かれました。今一つ前に話を拔かしましたが、「フレーベル」氏は、世の母と子の遊を見ると、先祖から遺傳的に行はれて居る事に氣付かれました、此の本を見ると、其事が書いてある。又遊には一般に凡てのものが行ふ處の遊がある。今、日本では子供に「ちよん〳〵」「あわゝ」「つむてん〳〵」「かつくり〳〵」と云ふ樣な事を子供に敎へますが、米國、或は日耳曼でも是に類した事をやります。卽ち手で叩いて、揉んで、燒く所へ入れると云ふやうな事をやります。そこでフ氏は是等の事を見拔きまして、一般的の遊を書きました。然して、此日本の母が本能的にやつて居る、「ちよんちよん」、「あわゝ」、は何等の爲めに子供に敎へるのでせうか、斯ういふ事が此母の本を一讀すれば判ります。先づ、是は身躰を知らしむるのであります。卽ち敎育は兒童自分に最も近き者から始めねばならない、故に先づ躰の各部分を知らしむるより外はないのです。又皆さん方がよく子供にやらせます、一がさした二がさした八がさしたと云ふは、果して何の爲めでせう、米國でも一番二番と數へ八番に當つた者は、死だ馬を食ふといふ遊をよくやります、是等の遊は何等の必要ありてやるのでせう、是は卽ち母親が本能的に數を敎へて居るのであります、扨て斯る事ども原理を基として、フ氏は世の母たる者が如何に子供を敎育すべきものかといふ事を、此母の本で知らしました、此を基として多くの敎育事業に關する著書の出で來りし事は、殆ど其數を知らないと云ふ狀である。此本の中に四十六の歌がある、今其二三の題目を申しますと、味の歌、魚の歌、指遊び、少女と星、蚕と月といへる如く光に關する歌、或は大工、小植木屋といふが如き商工に關する歌、或武夫と善兒といへるが如く道德に關する歌と云ふやうな題目であります。

此書の原書は、無論日耳曼であるが、翻譯は第一に二十五年前米國でできた。次は英國で出來た、三番目に日本で翻譯した、未だ此他にも譯書があるかも計りがたいが、多分以上の三つでありませう。此英書の方は日本の翻譯と同一に米國で出來たのであるが、意味と畫とは宜しいが、詩文と音樂が餘り宜しくないです、此書の方は彼の「プロー」さんが譯したので、原書の缺點たる詩文と音樂を改良したので、先づ此書が最も宜しくあります。

此母の本は保姆養成所では、餘程注意して敎授しますが、卽ち歐洲でも、米國でも、保姆傳習所などでは何の學科よりか眞先に、此母の本の研究を爲る、私どもは養成所で二回、繰返へして研究しました、又歐米では普通の母たる方が皆此書を研究します。又、此、簡單なる一小冊子の中より一種の文學が現はれた、卽ち「プロートハルソン」氏が此中より一種の文學を著はして居ります。

扨て、フ氏は此書に由りて、社交的と智育的と道德的との三つを充分に敎へたのであります。そして「フレーベル」氏は子供を敎育するのは、袋の中へ物を投げ入るゝが如くに見ないで、田畑に蒔きた種が、やがて芽を出す、敎育は此芽を作り立てるのであると云ふが如く見たのであります。今爰に社交的に關し一の歌があります。

鳥の巢

をさなごは、生命あるものをながめつゝ、好めるものにあふ時は、唯たのしさにぞ充たさるゝ、おのが心の想像を、動かす像は何にても、倦むことなしにいくたびも、思ひ浮べて樂しみつ、かくて生命あるものゝうち、殊更愛づるそのものゝ、像をしかと覺ゆなり。

今彼等の目前に鳥の巢を持ち來らは如何、彼等は屹度之に注意して、決して他の物を顧みないでせう、又鷄の母鳥が雛を呼びつゝあるを見ば、必ず是に心を奪はれ、決して他に行くを好まないでせう、是れは何故でせう、彼等は斯る可憐の動物にも母の愛といへる事の存する事を、自分の身に比較して認むるからであると云ふ事を「フレーベル」氏が見拔いて、斯樣の歌を以て正しき眞理を示したのであります。

草刈の遊

凡てのものに一致てふことの存する眞理をば、幼な心によびおこし、其ことわけを事毎に、敎ふる事ぞかなめなる、是なかりせばくさぐさの、汝がはねをりも効を見ず、高き眞理にをさな子を、進ましめんもいとかたし、草刈遊を幼兒に、敎ふる母は此ことの、端緒をはやくより授くなり。

扨て母が我子を敎育するに、總て社會には一致と云ふ事の存する事を子供等に悟らしめねばならぬ、卽ち呉服屋、米屋、八百屋、と各々分離して居る樣であるが。私どもが今反物が入用ならば、呉服屋へ行きて購ひます。米は米屋、八百物は八百屋で買ひます。かく其求むる者と求めらるゝ者との間にも、又呉服屋と米屋と八百屋も相助け合つて行く。卽ち其等の間に一致連絡てふものがあつて、爰に始めて社會は立ち行くものであると云ふ事を、フ氏は子供の前で、說敎も演說もしないで、斯る平易なる歌に由りて敎へて居るのであります。

さて、又社交上、互の關係は親切が第一である。親切なる者は友を得るからに、友だちを得ると、否とは親切と否とに由りて別るゝものといふ事を、フ氏が此歌で說き明かしました。

又此書の中にある歌を讀んで見ると、人間の價値といふ事などを含める歌もあります卽ち、能く、人は身に美服を纏ふた者、或は顏や形の美しいのを以て、美とするが、「フレーベル」氏は左樣なる外形の如何には、毫も美をおかず、眞に其心の狀態が潔白であるか、否やを以て人間の價値を判ずるのであるといふ、高尙なる事を、極めて平易なる一つの歌に由りて知らしめたのであります。それ故此母の本の口繪にも、武裝せる、いとも立派なる武士が畫いてありますが、是に由りても人間の價値といふ事が判るのであります、卽ち其歌は。

武士とよき兒

たゞ一人此世に住むに非ずてふ、くしきおもひは幼兒の、心の底にもえそめつ、あたりかすかにひゞきくる、聲と形にふるゝたび、いとめづらしげに想像す、かくておぼろに人生の、務を悟り初めし時、是ぞ子供の新しき、生涯の段の始りぞ、さらば母たる人は皆、人目暗ます僞の、あだし光に誘はるゝ事より子供を護りつつ、又外形にのみ其心、用ふる習起させず、內の命を引き起し、育てあげんとはげむべし、そこで、幼稚園で最も必要な者は何であるかと云へば、決して恩物折紙疊紙が必要では無い卽ち此母の本を巧に活用する事が最も大切である、此本を少しく研究すると、子供といふ者は、如何に貴重な者で、保育事業がどれ程價値

ある者かと云ふ事が判るのであります。
次に今度は智育の方は如何にして施すかといへば、卽ち味の歌、香の歌、數へる歌、光に關する歌、商工に關はる歌、花の歌、動物の歌などが智育の方である。
次に德育に就きては魚の歌其他色々あります、今其魚の歌を讀みますと。

魚

活きたる生命あるところ、いづく如何なるはてまでも、子等は勇みて集りて、淸く輝くものゝうちに、いつかけがれぬ心もて、其樂やさとるらん、かくして遂に聖き事、擇む心のおこりなば、母の喜悅いかなるぞ、たとへんものもなかるべし。
水淸き山下かげのいさゝ川、かゞやく魚はあちこちに、岩根の水にをどりけり、浮びあつまり一の字に、なるかと思へば忽ちに、くの字に折れて遊ぶなり、
さて今、兒童を淸き小川のほとりにつれ行き、小魚の自由に遊泳せる狀を見しむるか、或は山野に伴ひて、小鳥の戲れ遊べるを見しむれば、屹度彼等は是を捕へん事に餘念は無いでせう、是はなぜでせう、「フレーベル」は斯る點を觀察して、子供はいつも自由を望んで居るといふ事を觀察しました、今小魚を捕へんとするも、彼は左にかはし、右に避け、小鳥を捕へんとするも、捕へんとして忽ち飛び、捕へんとして忽ち逃げる、其出沒自在である、そこで子供は益其自由を捕へんとして餘念は無い、私どもにしても何かいつも、心中にしたい〳〵あれは斯う、これも斯うと、絕えず希望を懷いて居るが、さて是を實行する事となると、或は金が無いが爲めとか、或は他人の爲めに妨げられて、遂には其希望を遂ぐる事が出來ぬ事が度々にある。そこで私どもゝ、どうか此等の妨げを打破して、自由を得たいと思ひます。然して此自由を得るには、一の定律に從はねばならぬ、魚の水中に於ける、鳥の氣中に於ける、皆此定律に從ふ故に出沒自由を得るのである。是等の點をフ氏が洞察して母の本に書いたのであります。

第四講　萬國幼稚園聯合會

今日は萬國聯合保姆會に就きお話しますが、本會は今より十一年前に合衆國の婦人だちが始めて「フ゛ラデルフ゛ア」に於て開設したのが起りでありますが、さて、なぜ萬國聯合保姆會といふかといふに、合衆國に本會が起つた時に、隣國加奈陀の幼稚園の保姆たちが、入會を許しくれとの請求があつて、遂には會員の中に入るゝ事となつた、そこで今迄の名目では不都合なりといふところから、萬國と云ふの二字を冠らする事とした、ところが夫れが段々と發達して、今日では萬國の二字が現實になつて來て、各國に會員も出來て、現に日本にも會員があるやうになりました、皆さんの中にも英語の御素養ある方は御入會あらば其報告書に由りて保育上の新智識を得、幼稚園事業の上に就き進歩を來す事は少々でありますまい、又英語の素養なき方でも、其報告を誰か英語の出來る方に就きて話を聞くといふが如く、お遣りになつたら、其御利益は確にあらうと思ひます。でどうか皆さん本會へ御加入の程をお勸めします。本會は一年一回の報告があつて、會費は年が二圓であります。
然して本會の目的如何といふに、先づ一方には幼稚園事業を擴張するが爲めに、諸方より種々の考按問題を集めて、之に就き研究して、益保育上の智見を得たいといふ事と、二は幼稚園事業につき各共同して興味を持ちて行く事、三に各地幼稚園設立の助けとすること、四に各地保姆練習所を進歩發達せしむるの手段としたいといへる事が本會の目的とするところであります。
今本會員數の統計を書きませう。

「カリホルニヤ」	百四十九人	「コンヂクチカット」	百九十二人
「デラワー」	百三十六人	「イリノイズ」	六百四十五人
「アイヲア」	百二十人	「インヂアナ」	二十二人

「カンサス」　十五人
「ルイジアナ」　六十人
「マサッチユセッチユ」　七百九十人
「ミンチソタ」　九十六人
「ニユーゼルシー」　六十人
北「カロライナ」　百十五人
「ペンシルバニア」　八百六十五人
南「カロライナ」　六十七人
「威士汗心」　六十五人
合計　六千七百六十一人

「ケンタッキー」　四十七人
「メリーランド」　三十五人
「ミシガン」　百人
「ミスシッピー」　四百二十三人
「ニユーヨーク」　二千七十二人
「ヲハイヲ」　五百五十九人
「ロード」島　九十九人
「ワシントン」　二十人

今爰に掲げました中で、會員數の多き地は悉く婦人が働いて居る處であります。若し皆さんが此會に御入會なさつて保育事業の爲め御研究なさる事となつたならば當市なぎは是等の地に劣らぬやうになりなす事を私は固く信じます。尙爰に書いたのは大抵、支部のある土地ですが、其外支部の設の無い地方の會員が九十五人ある、そして十一年前に本會を起してより以來、左の各地に於て都合七回開かれました。

一千八百九十七年、卽ち明治三十年で、今より六年前「セントルイス」で開會した、次は千八百九十八年は「フヰラデルフヰア」に於て開かれました、次は千八百九十九年に「コロンブス」に開設した、次は千九百年に「ニューヨーク」の近傍で開きました、次は千九百一年に「シカゴ」で開いた、次は千九百二年に「ボストン」で開いた、次は千九百三年に「ヘツストボーク」に開かれました。そして此等の土地は各千五百哩も距りて居つて大抵今年は西の方、來年は東の方と、年々交互に開設して、なるべく會員の出席の便利を計ります。今會員が「セントルイス」から「ボストン」に行くとしても、其旅費が實に百六十圓を要するのです、そこで年々交互に開會の土地を變へるのであります。

そして、此集に就きて數箇條の注意すべき點がある。そは先づ本會は幼年の者迄も集まる、本會は開放して一の公會とし、何人も出席する事が出來る、又此會に臨席しますと非常に歡迎する、又此集りに於て知名の士が有益なる演說をする、又一般の敎育と幼稚園保育に付問題を提出して討論する、又特に皆さんの御記憶を願ひますは會員が如何程、遠方なりとても喜びて出席するの一事であります。

扨て六年前に「セントルイス」で開いた時の問題等に就き今其重なる點のみを擧げますれば、此時の出席會員が一千二百人で其時に學務課長の「コイノルバーカー」氏が新敎育に就いてといふ題で演說せられました。其時の問題の要點を申しますと母の本を如何に活用すべきか、天然物は如何に取扱ふべき、社會的關係は如何、慈善事業に就きといふが如き問題で、會員の意見を求めました。

「フヰラデルフヰア」で、開會の時は四十ヶ處の地方の幼稚園より先生が集まりました。此時には南亞米利加、日耳曼と日本とよりの手紙の報告があつた。此集まりの最後に何時も保姆養成所の進步の方法に就き研究するのが例となつて居る、それには現在進步の實況を報告比較し尙今後の研究すべき問題を定めて行くといふやうに遣るから、各地の保姆學校も決して平氣では居られない、皆競爭して進步の譽を得ん事を勤むるといふ有樣でありますから、其結果が非常によいのであります、

「コロンバス」の時は、一千人の保姆が集まつたが、其時の問題は遊戲より課業に進む、母と幼稚園、文學の研究、幼稚園に於ける美術、最新の心理學と云ふが如き題目であつた又「ニューヨーク」の近傍で開きました時には遊戲の祭と云ふ事を執行しました、之れは多くの保姆が美麗なる白衣を着して遊戲をするので、其整頓して一致せる事、其技の優美なる事、皆人の目を驚かしましたが、其故新聞や雜誌で非常に稱美した、其時私も參會はしましたが、何分長く遊戲をやらないですから、此中に加はりて共に遊戲をする事も出來ず、只牛みたやうにして見物しました。

此地は、「ニューヨーク」市と一帶の河を隔てた地で、其間には立派なる橋もあると云ふ處でしたが、其集まりに、出席の人員は、二千人で、又軍樂隊もあつて興を添へた。

其會で「ばメーピー」氏が社會に於ける一般人が有する幼稚園の觀念といへる題で演說がありました。且つ文部大臣「ダブルチーハリス」氏の幼稚園に對する危險といふ演說と、學務官の國に於ける幼稚園の價値といふやうなる演說もあつた。

「シカゴ」で開かれた時は、千人の會員が集まつたが、其時幼稚園の缺點を保姆等互に批評した、今其個條を讀みますから御書留めなさい。

(一)保姆の思想が狹い、(二)一致が缺げて居る、(三)互に人身攻擊的の批評をやる、(四)保育の事業に失敗して落膽する、(五)自分に總ての事が出來ぬ、(六)己の幼稚園にのみ熱心過ぎる、(七)新思想を持たない、(八)園內の仕事を怠る、(九)時間を正確に守らぬ、(十)物事規律正しくやらぬ、(十一)言語が正當でない、(十二)口に高尙なる學理を言ふも實地の活用が出來ぬ、(十三)性質がよくない、(十四)よく練習がしてない、(十五)節儉を守らない、(十六)恥かし過ぎて勇氣が無い、(十七)幼稚敎育にのみ着眼して一般の敎育を疎にする、(十八)自分の保姆學校だけに熱心である、(十九)一般の練習が足りない。

次に「ボストン」の時は千五百人は會場の席に就き、六百人外に立ちたが、中五百人は謝絕した、此時も無論公會であつたが、有名なる敎育家、工業學校長「ヤブロー」氏、などの演說もあつた。此時の集まりより彼の獨逸の「フランケンブルク」に於ける「フレーベル」氏の紀念會へ、五百七十弗を寄附しました。

次に今年「ピテスボーク」の大會には、多くの保姆が集りましたが、此時は別に小學校の子供のみ、千二百人も集めて、名高き嘶上手の人を賴みて、子供に適せる面白い話をして貰つて、其話する狀に就き、保姆だちが見て、自分の參考としました。又有名なる富豪家「カーネギー」氏は、私費を以て、大なる圖書館を起し、一週に二度、小學校の生徒、其他多くの婦人を集める會を開いて居ります。

第五講　米國の保姆學校

昨日は萬國聯合保姆會に就きて御話しました、今日は保姆學校の景況を申し上げますが、扨て其練習所も三十五も在つて、皆各或部分に長所々々があつて、其何れがよくて何れがわるいと云ふ事は、今一々申し上げることは出來ませんが、其中「セントルイス」「シカゴ」「ボストン」「ニューヨーク」と此四ヶ所の保姆練習所に就き、彼れ是れ拔きて申し上げます。

此保姆學校はよい學校では有るが、早く卒へると云ふ譯には行かぬ、二ヶ年の授業料などが四百圓から六百圓であります、私が考へます處では、日本の方などはこちらで充分幼稚園に於て保育上の素地を作つて置いて、其上で、あちらへ行きて幼稚園の事を御研究になる方が宜しからうと思ひます。是は序を以て一言御話しますのです、そして此保姆學校發達の次第は如何にありしかと云ふ事に就き、あちらの或婦人の說かれました事があります。それは米國に於て最初に私立で幼稚園を設立しましたが、其頃は未だ經費も充分でなく、子供も少なく、誠に微々たる有樣であつた、卽ち助手の如きも充分保育上の心得等の無い者を使ふて居ると云ふぐらゐで有つたが、其後幼稚園事業が發達して各處に設立すると云ふ事になつて、猶一層、保姆や助手の需用が增して來た處から爰に保姆養成の敎育が必要となりて遂に保姆學校を設くる事となつたのであります。

然して其敎育の理想は如何、言葉を換えますれば如何なる人物を作り出だすのであるかと云ひますと、先づ保姆たる者は婦人らしく、人情に厚く、同情的興味を有し、美術家である者でなくてはならぬから、充分に是等の技量と德性とを具ふる人物を養成するので、決して學者的の人物を作るのでは無いのであります。

そして此學校の生徒は朝、半日は幼稚園で保育の仕事をして、晝から恩物、原理、美術、音樂、天然物、兒童心理、遊戲などの學科を研究します。

扨て斯の如く極始めは私立の幼稚園から、漸次發達して保姆傳習所の設立となり、遂に公立學校となつたのであります、ところが公立となつた時に、爰に一つの問題か起つて來た。そは今迄は私立であつたから入學するにも易く、且つ在學中何彼が自由であつたが、公立となつてからは入學するにも試驗があり、又總ての事に規律が立つて中々從來の如く自由がきかぬ事となつた、そこで先づ如何にして入學せんと云ふ事となつた、且つ他の學校と比較するの必要が起つた、其れは何と比較するか、大學校と比較する要も無い、そこで遂に師範學校と比較するが正當であると云ふ事となつた。

今其比較の要點を申しますと、師範學校の費用は國庫支辨である、且つ學科に就きては充分に勉强もせねばならぬ、又其敎ふる人は男子の先生だちである、又師範は建築も宏壯で、道具書籍の設備も充分である。且先生方の學力も充分で、又師範の方では高尙なる科目を研究して置かぬと男でも女でも他日敎鞭を採る事が出來ぬから、皆充分なる勉强をする、且つ師範學校は男子の先生だちが敎授するのですからどうしても生徒の學力が保姆學校よりか充分である、以上の諸點が保姆學校よりかも遙に勝つて居る。

扨て又爰に保姆學校と師範學校との差異の點が四つあります。そは師範學校は充分に勉强の時を得るが、保姆學校は半日だけの時間しか無い、又師範學校は精神勢力の最も盛なる朝の時間に於て勉强する、然るに保姆學校生徒は朝は保育の實地を遣つて、晝後精神の疲勞せる時に於て學科の研究に從はねばならぬ。又師範では算術、地理、歷史等の學科に就き、既に一とほり學べる者をして、さて、之れを如何に敎授すべきかを敎ふるのであるが、保姆學校はそうで無い、先づ最初から地理歷史の事柄を習ひて後に之れを如何に應用すべきかを學ぶのである、又保姆學校は入學する者の學力が充分でない、音樂に長けて居ない、美術に長けて居ない、品性の訓練が不充分である、是等は現時米國保姆學校の缺點であります。次に師範學校は先に原理を學びて後に應用に及ぶ。卽ち心理學でも、敎育學でも、眞先に其學理原則を學びて後、其應用に及びます。然るに保姆學校は原理を先きに、應用を後にと云ふ順序もなく、且つ少しゝか習はぬ、そこで原理と應用との連絡がないから、正確なる智識を得る事は出來ませぬ、又師範學校は手藝はなくて原理が重もであります が、保姆學校は手藝が重もで原理が後である、

さて以上の如き缺點がありますので、現今は大に此等の點に力を盡す事となつて居ります。是は只に保姆學校の缺陷のみを擧げたので、皆さんも斯る危ふき點に御注意ありましたら、或は御參考ともならんかと思ひます。

次に其保姆學校に於て、或時先生方が御研究になつた問題がありますで、今之れを黑板に揭げませう。

一、母の本を如何なる方面に活用すべきぞ。
二、保育に用ふる一年間の順序豫定案は如何に編成すべきか。
三、「フレーベル」氏の著書なる人間の敎育といへる本を如何に敎ふべきか。
四、文學を如何に活用すべきか。
五、敎育歷史を如何に應用すべきか。
六、小學校敎育の方法は如何。
七、社會學を如何に敎ふるか。
八、有名なる方の演說の筆記は如何にすべきぞ。
九、幼稚案內なる本を使用するを可とするか若し用ふるとせば如何に使用すべきか。
十、子供を敎ふる實地練習の時間は幾許の長さにて可なりや。
十一、戲れに物を爲る事ありや否。
十二、恩物と手藝とは如何に取扱はしむべきぞ。
十三、話、音樂、遊戲、圖畫、粘土細工、彩色、理科、心理學を如何に活用すべきぞ。

今右の問題に就き、最近の說を以て、私が答へませう。

先日より度々申し上げますやうに、母の本は今は何處迄も使用して居ます、つまり幼稚保育の仕事は此母の本に胚胎するのであつて、無論智育の方面よりも、体育の方面よりも、德育の方面よりも、活用せねばなりませぬ。

次に一年間の順序書は、先生が此尋に由りて、春は花、夏は如何にと、時候に從ひて考按を立てゝ、出し合はして保姆學校の先生だちが、之に就きて批評を加へます。

人間敎育といふ書物は、「フレーベル」氏の著書で、敎育上には貴重の本であつて、米國では何處迄も使つて居ます。日本でも、此書をお使ひになつて居ますか、どうか、少しくむつかしき本では有りますが、御使用なさる事を望みます。又文學は子供の話に連合して遣ります。或は場合に由りては「ダンテ」「セークスピーア」の文學をも利用する。

敎育歴史は皆使ふ。

次に小學校の敎育に就きては、保姆たる者は、充分研究します。今爰に書きました如くに、昔は幼稚園と小學校とは此上の圖のやうに互に獨立して、保育は保育、小學校敎育は敎育、と各相分離して居りましたが、然し、此二者は何時迄も分離して居る可き筈の者ではない、小學校の先生だちは、兒童が幼稚で如何なる手藝を學び、又如何なる歌を習ひしかと云ふ事を知らでは、完全なる敎育は出來ぬ、又幼稚園の保姆だちも、後來、園兒が小學に於て、果して如何に敎育せらるゝかを研究するの必要があります。そこで、現今は圖に示すやうに兩者全く相連絡する事となりました。又次に社會學は僅に遣ります。次に名ある先生方の演說を聽く時には、其話の大要の筋書だけ認め置きて、之れを骨子として、自分に文章を作ると云ふ事が有益なる遣り方であります。

それから米國では、「クラウス」氏の幼稚案内と云ふ本がある。日本でも此に類した本はありませう、確か加藤さんが著述の幼稚園案内といふ本がありますやうに覺えて居ますが、米國では斯る書物を用ゐませぬ、日本でも斯る書物よりも充分に母の本を活用するが宜しくあります。

次に保姆學校の生徒は、保育の實地と、學科の研究とを一日に學ぶのであるから、非常に其心身、共に疲勞するであるそこで實地練習の時間はなるべく短くします。

又幼稚園の先生方には、餘り嚴格に失する嫌がある。そー餘りしかつめらしくして、決して幼兒の保育は出來るものではない、少しは滑稽を加味する事が必要である、然し滑稽も濫用すると、或は威嚴を損し、往々野卑に流るゝ事もある。然しながら元來滑稽は人の精神の沈鬱固執を融和するものであるから、或程度内に於ては、滑稽的に遣る事は大によろしい、繰返へして申しますれば、嚴に失せず、寛に流れず、宜しく其中庸を採つて行くべきであります。

第六講　五官の遊戯

味の歌。

天然は、五感の窓より幼子を、尋ねもとめて絶間なく、敎の光を與へけり、母は光を導かんと、五感の窓より靈魂の、とびらを明けて幼子の、尊き心を天地の、惠のまゝに育てけり、げにも五感は魂の、窓にしあれば父母よ、其幼子のふれ易さ、心の窓に氣を付けて、清さゐとのみとめさせよ、さらば生命のある限り、世の苦しみも憂き事も、恐れぬ人となるぞかし、さらば生命のある限り、世の樂しみを身にそへて、望の光輝かん。

香の歌。

世の中に、活きとし活ける物は皆、かくれて外に見えねども、小さき舌を動かせよ、其味は如何なるぞ、とば甘しと言はねども、舌打ならし喜びて、うなづく狀の面白さ、甘きすもゝの甘きこと、顏に形に現はし

て、

此五感の歌の初めの味の歌に、天然は五感の意より幼子を尋ね求めて絶えまなく、教の光を與へけりとあります、是は子供は何時も五感によりて種々の知識を得る、即ち光や物体は目より意識に入り、香は鼻より、味は舌より、音は耳よりと云ふやうに、凡ての觀念は五感の窓より内に入りて、遂に彼等の思想となり、更に又外部に發表するに至るのであります。

「フレーベル」氏は、智德体の三つの者は、何時も相關連するといふ事を喧しく申されましたが、然しながら、体育が先づ基礎で、身体が充分に發育すると、智育も從つて發育し、又德育も完きに至ります。

然して五感を練習するに、先、目では充分に物体を觀察せしめ、口にて種々の味を試みしめ、鼻はよく物の香を嗅がしめ、耳にて凡ての音聲を聞かしめて、充分に物の辨別を遣らす、かくして幼き時、五感の練習の完き人は、將來如何ほど物を知るかと云ふ程の發達を來します。

今五感の發達せる者と、否らざる者とを比較せば、五感の練習が如何に肝要で、如何に教育上尙ぶべき者なる事は判ります。故に物事興味を保たず冷淡なる者を、無感覺なる者と申します。即ち物を見れども見えず、音樂を聞くも其美妙を感ずるの能がないから、耳はあつても聞く事は出來ぬ、又味といふ事に就き一つの考ふべき事があります。音樂を好む者を音樂に嗜味を持つて居るといひ、又彼の人は着物に如何なる色を好む嗜味があるとか、誰れは教育に嗜味を持てる人であると云ふが、是れは夫等の事を舌で味ふて知つたのでは無いが、兎に角舌で物の味を知るが如しと云ふ意味を以て、云ふので、此他味といふ文字は學問上に多く使用します。

此味覺も大切であるが、「フレーベル」氏は幼き子供の教育は、先づ五感より始まる者であるから、充分に五感を働かしめて、將來彼等發達の基礎を作れといふ事を、此歌で教へたのであります。

然し此五感も自分の下部となる事もあり、又主人となる事もある、「フレーベル」氏はよく五感を使ひて清き、きれいな印象のみを採れと云ふことも、此歌の中へ含められました。結局り清き正しき者を見たり聞いたりすれば、自分が主人となりて、五感を使ふのであるが、是と反對で、穢い正しくない物を見聞きすると、遂に主客轉倒で、自分が五感の奴隷となるのである、そこで世の母先生たる者は、子供に對し、清き正しきものゝみの刺戟を與へて、決して彼等をして、五感の奴隷たらしめぬやう、教育すべきであります。

次は五感の教練が、如何に智育に關係するかに付き、御話しませう。

扨て知識と云ふ者は、五感の媒介に由りて得らるゝ者と云ふ事は勿論であるが、然し他人の心中、或ば考へと云ふが如きは、目にも見えねば、耳にも聞えぬ、然し此見えぬ者を見、聞えぬ者を聞き得るのが、智育の妙である。即獅子はこわい、鳩は溫順しいと云へど、此こわい溫順しいと云ふ事は、無形であつて、見る事も聞く事も出來ぬが、然し獅子なり鳩なりの實物を見れば、成程是はこわい、是は愛しいと云ふ事が判るのであります。

又「フレーベル」氏は標語に依りて、物を教へて居ました、即ち日本でも、味覺嗅覺の事を、他の事の標語に使ひます。彼の人は水臭い人とか、甘い人とか、あまい顏するとか云ひます。又正月とか、何とか、目出たき時に、あの松、竹、梅を使ひますが、あれは何ですか、松は常盤の色を變へず、竹は節長く、梅は雪中にも獨り香を放つ、所謂節操忍耐と云ふ意味の標語に使ふたのに外はないでせう、又注連を張りて海老など付けるは、あれは何でせう、是れも命長くと云ふ標語に外はない、又人に花を贈るにも椿の花は贈らぬものと云ふが、是も何であらう、椿の花は首が落ちると云ふ標語と思はれます。人に鯛を贈れば、物を見て既に其目出度い事が判る。さて恰も此樣に實物を見て、「フレトベル」氏は何時も標語を用ひて子供に五感の教育を遣つたのです。又此會員の中には聖書を御讀みになつた方もありませうが、此聖書の中にも、假令へば信者と云ふ事を塩だといふやうに標語で教へてあります、結局り塩は總ての食物の味を調和する、信者も社會の調和を計る者と云ふ意味であります。或時私が幼稚園の子供の前に百合の莖を持ちて來て、其鱗莖を剝いて

見せたところが、彼等は非常に面白く感じたらしくあつた、然るに其翌日になると、子供が葱を持つて來て、百合だ百合だと思つて居た、そこで私がそれは百合では無い、葱といふ者だといつて、之れを切つて其香を嗅がした、ところで子供は變な顔付をして成程百合とは違ふと了解した、扨て其後、或日の事一人の子供が他の子供に何か惡しき事を言ふた、すると此子供がおまへは葱の樣な聲だと云ふた事があります。即ち子供が之れも標語を使つたので、結局り子供といふ者は、何か斯樣に實物に由りて心の狀を現はすのである。爰を「フレーベル」氏が見拔いて、標語を以て敎育の方便としたのであります。今度は五感の練習が如何にして道德に關係するかに就き御話しませう、

前の歌の、心の窓に氣を付けて、清きあとのみとめさせよ、さらば生命のある限り、云々、以下の歌は五感の道德に關係せる事を云ひ含めてありますので、結局り人間の五感は、練習を積むと、凡ての刺戟に對し、鋭敏となり、又練習が足りないと遲鈍となる。然して五感の働きが鋭いならば、普通の人が聞き別ける事の出來ぬ音調をも、能く聞く事を得、又人が見る事のできぬ點をも、看破る事も出來て、總て物の差別がつく、すると從つて物の善惡美醜を識別するやうになる。之れと反對で、五感の感應が鈍い者は、物の善惡美醜を識別する事も鈍くなる事は明かであります。此こそ五感の働きが如何に德育に關係するかを證明して餘りある點であります。

扨て今又、爰に一つの研究すべき問題がある。それは世の母たる者が、子供の味感を練習するに當り、子供に乳を飲ませ、或時はばんを與へ、又果物を與ふるが如く、種々の物を混交して、味感を練習するがよいでせうか、或は同一の刺戟物を續けて與ふる方がよいでせうかと云ふの二つである、ところが、ばんならばんと同一の刺戟を與へますと、終には此刺戟を持つて行かねば承知せぬ樣になり、又少しの刺戟には餘り感じない樣になる。斯うなると段々感覺は遲鈍となつて、遂に正當なる發達は出來ぬ、私の隣家の母が私に向つて、どーも私方の子供は必ず一錢、錢くれといつて强請る、すると自分から菓子店にいつて、好める菓子を買つて來る、若し之れを遣らねば、だゞけて困る、どうしたらよいでせうかと尋ねました。是等が味の感覺を害したが爲めで、斯くなると、遂には子供の性質を害する樣になる。そこで五感を練習するにも、清く正しく遣ると、否とで、人間道德の上に至大の關係を及ぼすことゝなります。

次の歌に就いて、申しませうが

例へば百合は百合、薔薇は薔薇と、夫々固有の性質があつて、皆其性質は外部に現はれて居る。又人間も心に思ふ事は善きも惡しきも決して掩ふ事は出來ぬ、即ち何時か、顏に、聲に、動作に、現はれ出でます。そこで「フレーベル」氏は子供の幼き時から、五感の練習を充分にして、是は薔薇の花の香、是は百合と辨別して、遂にはあらゆる物に現はれたる性質の善しと惡しとを判別して、益々興味を生ぜしめねばならぬと云ふ事を、此容易き歌に含ましめたのであります。

私などの幼稚園で、五感に就いての遊戯をしますが、今其一二を御話しますと、先づ彼等を圓形に列べて、各々目を掩はしめ、香の歌などを歌ひて廻ります、暫くして歌の一句を了りし時に、彼等を止まらしめて薔薇、或は種々の花を示して、其香を嗅がし、其名を言はしむ、若し其名を言ひ當つる者あらば、褒美として此花を與へますといふやうにする遊びがあります。又前と同じやうに圓形を作りて、廻はる中に、或一人の子供を隱し置き、さて誰が隱れしかを言ひ當てさす樣にもします。又前の樣に目を掩はして、金物と木とを叩いて、其音を聞き別けしめ、或は「オルガン」に由りて、音楷などを聞き別けさして、之れで耳の練習をします、又毛織物と絹布とか、玻璃と板とか云ふ樣な者に、手を觸れさして、觸覺の練習をする、斯樣にして彼等の五感を充分に練習して、物の性質を差別する樣にと「フレーベル」氏が勸めました。

そして、特に皆さんの御注意を願ひます點は、五感の練習といへる事が、如何に智德体の三育に關係するかと云ふ點であります。前にも申し上げました如く、人間は五感の奴隸となつてはならぬ、必ず己れが主人の位置に立ちて、五感を奴隸に使ふやうにせねばならぬ、かくして物の性質を悟り、物の是非善惡を區別する

に至ることを期するのであります。

扨て、私どもが理想とせる人は、如何なる人物であるかと申しますと、第一に体が強健で、智力も健全で、德性も健强なる者、即ち三育共に健全なる者が實に理想の人物であります。かゝる人物たらしめんには、極幼き時に於て、五感の訓練を充分にして、物の善惡を識別するの能を養ひ置かねばなりません、然し其練習も、辨別も、何時迄も母や保姆だちの差圖指導に由らずして、可成的彼等をして自ら練習もし、辨別もすると云ふ樣に仕向ける事が、大切である、言葉を換えますれば、外よりの指導なくとも、彼等が自動的に善惡を差別するが如く、注意せよと云ふ事であります。

第七講　指の遊戯

皆さん、此日本の子供だちの能く遺つて居ます、何か指に關する歌があれば言つて下さい、私も練習所の生徒さんから聞きまして、斯樣なる種類の歌を集めて居ますが、其集めた物を忘れて參つたのでありますでどーか、皆さん方より御申し出でを望みます、（此時講習員の中より左の如き題目が出た）

指で風呂をしてあついかぬるいか。狐の窓。かち〳〵山。まだ有るでせう、それでは明日迄に紙切れに書いてお差出しを願ひます。

それでは是れより「フレーベル」氏が敎へられました指の遊びの歌、七つに就きお話しますで皆さんの方の子供の爲る遊と比較して御覽になりましたら、こちらの子供と、幾千里を隔つるあちらの國の子供と、殆ど同樣の事を爲て居ることを御了解になると思ひます。結局り如何に萬里を隔つるも、如何に國情を異にするも、子供の境涯と云ふものは同一であつて、何か世界中統一して居る點があるやうに思はれます。夫故に米國の子供が遺つて居る事を、日本にも、獨逸にも、遺つて居りまして、決して其間に互に敎へ傳へたのでもなくて、自然に人間の本能で現はれて來るのであります。是れに由りて考へますと、此指に由りて敎育するといふ事が、世の母たる者の子供を敎育する一大根本であるといふ事が判ります。

是れから歌に就いて御話しますが、此歌はどうか時間の後でお寫し置きを願つて置きます。

指の名。

幼子に、一つ〳〵の指の名を、又其指の用ひ方、いざや敎へよねんごろに、かくてあまたの樂しみは、これより得ると知れよかし。

此歌は、母への歌であつて、子供に歌はする歌は、別にあります。先づ世の母たり、保姆たる者は、此歌を誦讀して、其意味を充分會得して、指の名を敎ふる事から、始めよと云ふ事を「フレーベル」氏が此單簡な歌に由りて示されたのであります。

今次き〳〵に歌を示しませう。

小指の歌。

幼子は、小さき指を動かして、指の遊戯をなすぞかし、かくて道には幼子の、指の力も指つかふ、心の力もいやまさん。

此歌は、手指の價値を言ひ含めたのであります。

家族の歌。

幼子は、生れ落ちてよりはゞもなく、小さき部分は一つなる、全き者に和すといふ事を正しく悟るなり、老も若きも一家族、同じ一間に集ふ時、ちごにそれ〴〵敎ふべし。

此歌は、家族の狀を言ひしもので、即ち家庭の價値ある事を言ひ含めたる歌であります。

數の歌。

算ふる事は人々の、餘りおもみをおかずして、感ずる事もうすけれど、いとも貴き術にして、心をとめて見る人は、其必要をさとるべし。うるはしく算ふる事は、善と眞理に導くすべぞ、惡に打ち勝つ力こそ、日々

に新たによき道へ、すゝむるわざとなるぞかし。

是れは、數の價値の尙ぶべきことを言ふた歌であります。

指ピヤノの歌。

幼子を、常に喜ばす物より音のもれし時、その喜やいかならん、あるは心のなき人の、わ聞くまじき美妙なる音も、小兒の耳にはとゞくなり、いざ母親よ幼子の、耳うち開さ今日よりも、淸き調を聞かせなば、その行末は喜の、泉となりて流るらん。

此歌は調和と韻律の必要なることを言ふたのであります。

兄弟姉妹の歌。

幼子の、いざや臥床に急がんと、祈の爲めに小さき手を、合して母の膝下に、ひざまづく時、

母だちよ、天地暗く靜にて、世界の夜の眠る間も、神は眠らで守るてふ、事をば深く悟れかし、汝が願は聞かれんと、幸福汝を待ちもうけ、害を恐れのあさましき、道より子供を護るてふ、事をも深く信ぜかし、ちごらに敎へ授くるに、彼等は一つの生命に、結ばれあるてふ、眞理こそ、いとも尊き限なれ、此眞理より善き敎、外には又とあらじかし。

第二番の歌は指の名を敎ふることで、「フレーベル」氏は子供に物の名を敎へよと云ふたのであります。

世の母が、我子に對して、先づどうするかと云ふに、猫を見て「にやーにやー」と云ひ、犬を見せては「わんわん」と敎へ、雞を見せては「ぽーぽ」と云ふ樣に、本能的に種々の名を敎へます。是れを「フレーベル」氏が認めて、本能的でなく、組織立て、物の名を敎ふる事の必要を感じたのであります。

扨て此物の名を知ると云ふ事は、餘程難かしき事である。何人も其視覺に觸れる物は多くあるが、一々の名を等閑に見過す事が多い、今此岡山公園に、或は山に行きても、其總ての植物に就き、是れは何、あれは何と一々誤りなく、其名を擧げる人は恐らく少數でありませう、斯く見る事は多いが、其名を知る事は少ない、先頃も或子供を引連れて博覽會を參觀しました、所が是れは何、あれは何と一々尋ねます、此樣に子供と云ふ者は見た物は必ず名を知りたい、名を知つたら滿足するのが、子供の常である。これは實に造物主が惠與せる尙き天性である。此天性あればこそ彼等の心力は發達するのであります。然るに世の母だちが斯る場合に當りて、面倒臭いとか、五月蠅しとて、答へを與へず、甚だしきは、叱り飛ばして之れを退くるに至りては、如何に子供の貴き天性を無視したる罪の深きことよ、されば世の母、或は保姆たる者は、充分是點に注意して、宜しく彼等の天性を發展すべきであります。

今理科學者と無學者と比較すると、理學者は物を視察するに深く微細の點に迄も注意して、あれはあれ、是れは是れと、分類して、規則正しく、明確に心に修める、然るに無學の者は何物を見るも、亂雜に無闇に入れる、其故に理學者は他日他の物を視察するにも、心中毫も混雜せぬ、卽ち彼の點と、此點とが差ふとか、或は此處と彼處と一致して居ると云ふやうに、其異同を辨じて、益々物事を理解する。然るに無學者は心の狀が亂雜極まるから、同一の物を幾度見るも、其何者であるかゞ判らぬ、之れ順序なく物を觀察するから、物の異同卽ち類化が起らぬ所以である、要するに一方は規律正しく、一方は不規律である。「フレーベル」氏は爰を言ふたので、卽ち子供が花の名、木の名、鳥の名を知りたい知りたいと思ふ時に當りて、理學者が規律正しく物を理解すると同樣に、ちやんと秩序を立てゝ遣るべきであると言はれたのであります。

次は手指の價値を言ふたのであります。今皆さんが彼れを斯うせう、是れを斯うと、如何程よい事を心でお考へあつても、此考が皆さんの手指を通りて外に出ねば何の効もありますまい、又大工さんが斯ういふ座敷と、あーいふ家を新築せんと、考案がありましても、實際金を投じて材木を買ふて來て、建築を遣らねば何の効もない、又爰に有る、「オルガン」でも、是れを作つた技師が、大さを是ぐらいで、すとーぶを如何と云ふ考へのみで、實際に是れを組み立てる仕事を遣らなんだら今日私どもに如何程の便利と喜とを與へるでせうか。

又此時計にしても世界中の人が何人も、此器械の便利を受けぬ者はありません、然しながら、若しも此れを發明した者が、之を作り立てる材料と、考案丈で、それが未だ手に移つて來ませんとしたならば、此便利な者も何の役にも立たぬ、そこで「フレーベル」氏が歌のしりに此價値ある事を言ひました。此手指を修練せよと云ふ事は「フレーベル」の先生なる彼の有名なる「ペスタロジ」も言ふて居ましたが、「フレーベル」氏は是れに一歩を進めて、手指の價値と云ふことを喧ましく言ふたのであります。今皆さん方が博覽會に行きて御覽、其陳列品には織物もあれば、燒物もあり、彫刻物もあれば、細工物もある、然して彼等は一々人間の手の働きから出來た物である事を思ひましても、手指といふ者が如何に價値あるかは、了解する事が出來ます。

次の歌は家族團欒の價値の事であります。

「フレーベル」氏は、家庭の價値を學校よりも、政府よりも、尊い者と言はれました世の母或は保姆たる者は充分此歌の眞意を味ひ、子供をして家族の關係を知らしめ、之れに對する興味を惹き起さしむ可きであります。斯くして母たる者が子供の教育に注意し、子供が清らかなる家庭の空氣中に養はるゝ時は、其子供は屹度國家社會に役に立つ人物となりませう、此事は歴史上に其實證が澤山ある、即ち大抵偉大なる人物は、賢母ある家庭より出でゝ居ります、以上は家庭の善良なる場合に就いての話であつたが、反對に家庭が不良である場合に就いて、爰に一つの實例があります。或國に、或時代に、性行共に不良なる一人の女があつた。所が七十年の後、此女が子二百人の子孫を持つたが、其中より如何なる人物を出したかと云ふに、中二百八十人は乞食が出來、百四十人は牢に繋がれ、其餘の者は殆ど無能の者のみであつた。さて斯る次第で有るから、一方善良なる家庭は、次ぎ〳〵に善良なる子孫を出し、社會の分子は段々と清くなるが、是に反して、不良なる時は、其結果、遂に社會に大なる害毒を流す事となるのであります。

次は數ふるといふ事が、如何に教育の上に價値あるかを、世の母だちに知らしめた歌であつて。實際子供に歌はして遊戯を爲るには別に又歌があります。

日本でも何にか數に關係した遊を子供が爲るでせうが、一つ言つて下さいませ、毬をつく時などに歌を歌ひはしませぬか。

こゝに私が練習所の子供から聞いた歌があります。即ち一にとつてくりようと、二にかきつばた、三にさがりふぢ、四にしゝぼたんなど、云ふて遣るでせう。

米國、獨逸、あたりでも、やはり斯樣な歌が有つて、母が歌つて子供に數を教へて居ります。

此數へるといふ事が、無いとしたら、幼稚園などでも、第一に困まる、恩物も出來ねば、紙折りも、箸排へも、縫ひ取りも、豆細工も、何にも、爲す事は出來ぬ。又和歌にも、音樂にも、數が必用である。其他理科の如きは、ちつとも動かぬ事となる。即ち物理、化學とか、天文學とか、云ふ學科は、其原則は殆ど數理から割り出した者である事は、何人も首肯しませう。植物學の如きも、此花の雄蕊、何本で彼の花は幾本と云ふやうにして、其分類を爲る。又商賣するにも、數が土臺である。即ち損益、貸借の勘定にも、數に現はれるから、確實であります。其故、商業を營める者が、一度數の取扱を誤まらば、其結果多くの借金を生じ、遂には破産するの悲境に陷る事もある。夫故に母たり、保姆たる者は、子供を教育するに當り、先づ數の價値の貴き所以を合點して、子供を其方面に導くべきであります。

次は指ピヤノの歌で、これは音の調和と、韻律との大切なる事を、世の母たる者に知らしめた歌であります、(此時講師は實際「オルガン」により、種々の音を發し、調和と韻律との何物なるかを演ぜられたり、)此調和不調和と云ふ事は、人事上にも應用する、即ち己の意見と人の說と合一すると、是れは調和したのであるが、若し自他の意見が衝突する時は、不調和の場合であります。

扨て、其韻律と云ふ事は、子供は自然に遣つて居る。即ちお菓子を一つくださいと云ふ樣なる事を云ふにも、是れに一種の節を入れて、韻律的に遣つて居ります。又土方、人足の如き無教育の者ですら、其仕事を爲るに當り、ゑんやらやれと云ふて、韻律を使つて、彼等は己の仕事に興味を附けて居ります。

かく迄、韻律といへる者は、人生に必要で、幼兒教育に必須なる者で有るから、母たる者が、先づ充分音樂に興味を持ちて、巧に之れを兒童教育に活用せよと云ふ事を、此簡單で、而も平易なる歌に由りて、知らしめたのであります。

第八講　天然界の遊戯

今日は天然物に就いての歌の事を御話しますが、

歐米一般に、此母の本を非常に研究します。そして此中より、子供の性質を解し得て、之れを如何に導くかを知る事が出來ます。皆さんが、此本をお開きになりますと、初は難かしくて、餘り役にも立たぬかと思はれましようが、然し此書にある事を、皆さんの實驗に照して御覧になると、段々と其眞理を御會得になりませう、此本は子供の知識德性に於て、未だ惡しき慣習の出來ない内に、善良なる慣習を容るゝが爲に作られたので、世の人は幼兒の教育に就き、体育には餘程注意するが、智育と德育との方面は、稍もすれば等閑視する事があるが、是は三つ共に知らず〳〵の中に發達せしむるが肝要であります。

魚の歌。

活きたる生命あるところ、いづく如何なるはてまでも、子等は勇みて集りて、清く輝くものゝうちに、いつかけがれぬ心もて、其樂や悟るらん、かくして道に聖きこと、擇む心のおこりなば、母の喜悦いかなるぞ、たとへんものもなかるべし。

「フレーベル」氏は天然物を如何に用ひましたか、此日本などは天然物に對しては、興味を持てる事の深いと云ふ證據には、友禪に人物、花鳥の模樣を染め出し、其他塗物にも、織物にも、天然の美を利用する、或は繪畫も其通り、或は詩歌にも現はれて居る。特に和歌の中にも、花を詠じ、鳥を歌ひ、目を樂しむと云ふが如くに、一首の中にも無限の美を云ひ含めて居る。是れは卽ち日本の人が、天然物に興味のある證據でゐつて、此點は何れの國よりも優りて居ると云ふ事は、各國の認むる處であります。

皆さんも、九月頃になると月を見て樂しむ。又花の如きも自然の儘にて愛しますが、私共はそーはせぬ、結局り日本人は、他の國民よりか、一層天然物を愛する性質が深いのであります。處で日本人に限らず、何れの人も、皆此天然を樂しむ性はある。「フレーベル」氏も此を見拔いて、教育に利用したのであります。然しながら日本の方は、天然物を美術として見たので、「フレーベル」氏は智育德育を發達せしむる爲に用ひたのであります。一寸試驗しますが「ダヅルチーハリス」とは何ですか。是は私の文部大臣、此人の言葉に子供の爲めには、恩物手藝よりか、もつと貴き天然物を以て教育せねばならぬと、云ひました、然るに普通の人は恩物手藝を最も尙き者と思ひますが、是は誤謬である。「ハリス」氏の考は、天然物を最も貴重なる教育の材料と云ふたのであります、「フレーベル」氏の目的も、之れと等しく、卽ち母たる者が此母の本に由りて、充分天然物に興味を持ちて、我子を天然界に導かしむるのである、言ひ換ふれは、此本よりして天然に導き、遂に人間に迄、導くのであります。卽ち更に重ねて申しますれば、兒童をして、此本を通して、物を知り、遂には自己活動をするやうにするのである。物を知りて活動する、活動するが爲め、遂には實物から靈心界に及ぼす事となります。夫故此本の中には總ての婦人の爲めの心理學は明かに此母の本の中に現はれて居る。そこで、私の希望は皆さんが全くよく此母の本を御研究あらん事、只是のみであります。今此母の本によりて、母は己れの心の飢を止め、兒童は一の小石を見ても、小川を見ても、必ず自然界に神の存在を知る事を得、斯くして智育德育体育共に完全なる發育を遂げる事の、如何に、幸多きかを御考へが願ひたい。

魚の歌。

水清き、山下かげのいさゝ川、かゞやく魚はあちこちに、岩根の水にをどりけり、浮び集り一の字に、なるかと思へばたちまちに、くの字に折れて遊ぶなり。

上のは母への歌で、下のが小供への歌であります、此歌は卽ち自由と云ふ事を意味せる歌であるが、而して、

母が子供の前で自由と云ふ事の演說するのでは無い、卽ち自分が先づ此歌を讀みて、後此註解を研究して、充分に其眞理を悟りて、子供に此繪を見せて如何にして魚を採れるかに就き、話を爲るのであります。「フレーベル」氏は斯く言つた、自由を得るは物を見て說明するよりか、其中に含める規則を暗々裏に知らすのがよいと言ふた。此神の示されたる定律に從ふたなら、爰に眞の自由を得るので、卽ち子供に自由の眞理を把へさせんには、先づ其土臺として、强き意志の練習をして置かねばならぬ。私が若しも、今巡査に縛られて行ける罪人を見たならば、大に歎はしく感じます。其人こそ誠に人間の自由は無い、卽ち全く自由の權利を失へる者である、處が此者がかゝる哀れなる境涯に立ち來れるは、何でせう、卽ち此母たる者が自分が、人間其他、凡ての者には凡て自由と云ふ事の存在を知らずして、從つて意志の敎練を缺いだが爲めに、遂に惡と云ふ恐しき者に打ち勝ち能はざりし結果に外はありますまい。又時によると、子供が、やんちやを言ふのを强いて止めて、かしこい、かしこいと云ふが如き事があるならば、是は眞の自由で無い、子供は之れが爲め自由を失つたのである。權利を失つたのである。どーか、世の母だちがかくの如きかしこい的の母とならぬ樣望みます。

私の幼稚園で新たに入園して來る兒童には必ず母とか姉とか必ず附添人が來る、すると私は入園するや否直に是等附添人の手より子供を離してしまふ、そうすると初の內は子供が附添人が來る、すると私は入園するや否直二三日立つ內には、子供獨で喜びて課業をする樣になる。是は子供をして、幼稚園の規律に服從さすが爲であつて、子供も初は自由を奪はれしが如く感じても、遂には規律に從ふのが眞の自由であると云ふ事を知る樣に成るのであります。

風車の歌。

母へ、
物眞似はじむるおさなごの、いとさゝやかなる奮勵を、少しもおとしめさげしむな、同じきことをくり返へし、又くり返へす、其たびに樂しみあへず增るらん、更に物事ためすてふ、心もおきんとこしへに。

此歌は人間の目に見えぬ、力の尊き所以を母たる者に敎へた歌であります。

扨て人間の思想と云ふものは、肉眼では見る事は出來ぬ、此目に見えぬ考には、非常に力がある。今此世界の中の物は考なしに作つた者はありますまい、蒸汽船でも、汽車でも、敎育の事業でも、或は社會、政事、詩歌、美術に至る迄一つとして考へなしには出來ませぬ。皆目に見えぬ思想と云ふ者が土臺となつて、現はれるのであります。

私どもが富士の山を見、或は美しき花を見、或は如何に小なる虫をも見るが如く、總て宇宙の物を見まして、此等の物体の後には、我々の目に見えぬ、何か一つの不可思議なる大勢力の存在する事を認めます。

今一つは生命である、私が今爰に斯く立ちて、手を動かし、首を振りて、皆さんに御話をして居る。皆さんも、又机によりて、話をお聞きになる。是はお互に生命ある所以でありなす。卽ち生命、其物は肉眼にては見えねども、必ず我々は生命なる力の存在する事は認めます。そこで「フレーベル」氏は子供をして、肉眼で見る事の出來ぬ、妙なる力の存在を知ると、共に其力の價値を知りて、之を敬ふ樣にせよと言ふたのであります。

今母が子供に庭の植木の葉、花の動けるを見するに當り、彼の花はどうなつて居るか、彼の葉の動いて居るを見よ、あれは何が動かして居るだらう、風は何が動かすのであるぞと、充分に其動ける狀を觀察させます、そして後、此母の本の此處の繪と比較して、妙なる力の存在に氣を付けしめ、さて汝の手は何で働くか、其動く力は何であるか、其外地震、雷はと段々高尙に進んで話をする、斯くして遂に總て或現象の後方には、何か一つの偉大なる力のある事を知る迄に導くのであります。

小鳥の歌。

こども等が、小さき手にて雛鳥を、さし招くより愛らしき、遊は外になかりけり、我幼子は花園の、垣根に

遊ぶ雛鳥の、むれとひとりとよりつゝも、共に動きてかくれたる、生命のさまを目の前に、見るこそ世にはうれしけれ。

子供と云ふ者は何を最も喜ぶかと云ひますと、子供は必ず犬とか、猫とか、鳩とか、牛とか、必ず活物を喜びます、處がなぜ子供は活物を好むでせうか、即ち子供が生物を見ると自分と比較して、何か其一致せる點を發見するからである。子供は雛鳥の狀を見ると、自分の鏡に雛鳥の狀が映じ、鳥の鏡に己の狀が寫る。斯くして互に一致せる點、即ち生命と云ふ眞理のある事を發見し、爰に興味を起し、遂に生命の貴き事を悟るに至る者であると云ふ意であります。

鳥の巣の歌。

幼子は、生命ある者をながめつゝ、好める者にあふ時は、唯樂しきにぞ充たざるゝ、己が心の想像を動かす像は、何にても、倦むことなしにいくたびも、思ひ浮べて樂しみつ、かくて生命ある物のうち、殊更めづるそのものゝ、像をしかと覺ゆなり。

此歌は、爰に一つの鳥の巣があつて、母鳥は今子鳥の餌を求むる爲に、他に飛び去りました。そこで子供はなぜ彼の母鳥は此子鳥を捨て置いて、いつたでせうかと、疑問を起した。母は靜に母鳥は子鳥を捨てたのでなくて、子鳥の餌を求めにいつたのであると言つた。そこで子供等は自己が母の愛に育てらるゝの點と比較して、其一致せる點に興味を覺え、自分の母上が如何に自分を保護するかを悟つたと云ふの意味であつて「フレーベル」氏は此母と自分の關係と母鳥と子鳥の關係に由りて、天の神が如何に我々人間を保護し給へるかを敎ふる考に由り、此歌を書いたのであります。

その目に見えぬ力は、斯うであつて、眞の自由は斯うであつて、神樣は斯く支配し給ふ者であると、高尙なる事を說き聞かすとも、彼等子供には判らぬ、そこで斯る難しき說明をなさんよりは、最も彼等の心情に適したる方法に由り、斯る平易なる歌によりて、此高尙なる考を幼兒の心中に容れ置く事の必要を敎へたのであります。

第九講　光の遊戯

本時間は光と云ふ題目に就いての御話でありますが、此母の本は初めは低き事より說き起して、段々と高きに昇つて居りますで、本時から段々と月曜に至る迄、少しく高尙なる道德に關して御話を致しませう。今日迄御話した事は山とか、川とか、月とか、星とか、いへる題目に就き、重もに物質的の方面より申し上げたのでありますが、今度は一歩進めて、少しく高尙に御話せうと思ひます。

即ち此光に就いて、一は靈界より一は智識界より此二方面に就いて申し上げませう。

我々は此世界に於て、多くの物を見るが、然し未だ我々の見ぬ物も澤山ある、又今或人に或事を尋ねて、一度で判らぬ、そこで其人がよく判る樣に說明した、それで其人の思想が判つた場合に於て、私共は其了解した事を見たと云ひます、即ち物を了解した事を見ると云ふ、其他宇宙の事總て肉眼では見る事の出來ぬ事が澤山有るが、此無形の者も智識と云ふ心の眼で見ると、充分に其物を見る事が出來る。此心の眼で物を見ると云ふ事は、中々難い事である。今其見ると云ふ事に就いて一つの例を申しませう、

今一人の子供を一つの暗室に入れたと假定して、爰に小さき窓を一つ明ける、そーすると此子供は此小さき窓よりか、外部を見る事は出來ぬ、次に又一つの窓を明けると又夫だけ明るくなつて、夫だけ外部を多く見る事が出來る。斯くして遂に四方八方に窓を明けると、段々と明るくもなり、又夫だけ視界は廣くなる。又植物學者が植物を分解して、夫々分類をすると、夫だけ窓が明いたのである。又天文學者が天體を觀察して、一の法則を發見し、音樂、美術を研究する、皆夫だけの窓が明くのであります。そこで丁度、一人の子供が暗室に居つたのが一面に明るくなつたが如くに、多くの物を知るのであります。

かくの如く、智識に於ても眼を開く事が出來る。即ち天然統一の規則を見、

大なる神の支配を見抜きて、遂に靈界の心は神である事を悟りて、善を愛し美を尙び、德を喜ぶの域に達すれば、是靈界の窗を明けたのであります。

今私と詩人と比較しますと、詩人は多くの物を見て、忽ち之れを詩や歌に作る。私は多く總ての者を見ぬ故、詩にも歌にも作る事は出來ませぬ、是れ物を見ると見ぬとで、かゝる結果に差異が有るのであります。又今日本の政事社會に於て、伊藤さんや、井上さんの政事上の眼と、我々のと比較しますれば、大なる差異がある。卽ち伊藤さんや井上さんは政事社界をずつと、遠方迄も見て居られますが、我々の眼は政事界の一小部分をも見て居らぬ。是れ又見ると見ぬとの結果である。

もう、一つ幼稚園の保姆だちにも、眞の保姆と又猿の人眞似と云ふ樣なる保姆とは、大に其實價が違ふ、一はよく物を見る方で、一は其反對である。私がかゝる例を引きましたのは、前日御話した、米國の幼稚園保姆の批評を以て、なぜ斯ることを申しますかは、御了解になりませう、「フレーベル」氏は此處の區別を此母の本で示したのであります。

幼兒と月の歌。

月を見よ來りて我兒月を見よ、月はあなたの山の端に、はや現はれて遠近の、景色さだかに照し行く、光あまりにあかければ、夜も晝かとぞ思はるゝ、來れよ月は遠方の、眠れる森を打越えて、我兒のそばにいざ來れ、我はあまりに遠ければ、夜も晝かとぞ思はるゝ、來れよ月は遠方の、眠れる森を打越えて、我兒のそばにいざ來れ、我はあまりに遠ければ、空なる家をふり捨てゝ、そこに行くことかなはねど、我身の光は夜もすがら、そこに送らん我子供、此我光我愛を、受けてかしこき子となれよ、よなよな我は空に立ち汝が行末を守るべし、いざやかへさん今宵より、やさしき愛をもろともに、さらば我身我君よ、受けたる愛の言の葉は、かへすも愛の外ぞなき。

童と月。

遙かなる、み空の物を何故に、童の心はかくばかり、近くさやけく思ふらん、遠きみ空のものを見て、深きちなみを結ばんと、望むは何の故なるぞ、これぞ小さき子の心、開く助けとなる敎ぞ、小さく雄々しき想像を、穢すをやめて面白き、現象を確とねさしをきて、眞の思想を得る道は、まことのちなみを知る道を、外部に見ゆるのみにより、內部の結びを悟るべし、其時までは愛らしき、想像の家を壞つなよ、かゝる思念は幼子の、ちゑを增すべきたよりなり、さらば童の愛らしき、夢路をむだにさわがせて、すべての物は見ゆる如く、あらぬものぞと告ぐるなよ、

爰に揭げたのは、子供が梯をかけて月を採りに行きたいと云ふて居る處で、初めに母が子供に月を見せるときに、あれあの月をお見なさい、如何に美しく輝いて居る事よ、と言つて、指し敎ふると、子供は屹度手を延して是を捕ふとする。「フレーベル」氏が此點を御氣付きなさつて、幼い時から月の光とか、星の輝ける狀、或は太陽が山より出づる狀、山に入る狀などの美しき狀を見するのは、必要である。卽ち天にある大なる力を認むる爲めには、日月の輝ける狀を觀る程、高尙で、而も優美なる者は無いと言はれたのであります。

今「ヘブラエ」とて名高き詩人の語があるで、此處で讀みませう、

我汝の指のわざとなる、天を見、汝の設け給へる月と星とを見るに、世の人は如何なるものなれば、これを見、心にとめ給ふや、人の子は如何なるものなれば、これをかへりみ給ふや。

もろ〳〵の天は、神の榮光を現し、おほぞら只其みを手のわざを示す、此言葉を彼の日につたへ、此世智識を彼の夜に送る、語らず言はず其聲聞えざるに、其ひゞきは全地に普く、其言葉は地のたてに迄及ぶ、神は彼處にあげばりを、日の爲めにまうけ給へり、

或人の言葉に、人が天體を想像するに、神を以て想像の目的物でないと言ふ者は、狂氣人であると云ひました。爰に最も面白い歌があります。

早くより、汝が子に知らせ、此眞理、その月と心をなぐさむる、物は殘らず其手もて、捕へられぬといふことを。

若しも今あなた方が子供の前に一面の平面鏡を持ち來り、太陽の光を受けて是を壁などに反射さして、御覽、彼等は屹度喜びてこれを採らんとするでありませう、ところが如何にしても此反射光を手に採る事は出來まするまい、然しながら、是を心の内には採る事は出來る言葉を重ねて言ひますれば、世界の中に在る物の中、其美しきことを手にて捕へる事は出來ぬが、心の手には捕へ得るものであると云ふ事を知らしめた歌であります。此手で物を掴むといふことに就き一口申し上げますが、

日本の子供を西洋の子供と比較すると或點に於て、違つて居る。それは日本の子供さんが私などの室に來る、物が置いてあつても、ちやんとして目で見てだけ居りますが、私などの子はぢつと見て居ないで、直に手で掴で見ます。是は一寸と序に申し上げたのですが、さて本論に移りて來ますが、お互人間の最も大切なる寶とする者は何物でせうか、綾や緞子の帶でもあるまい、金でもなければ玉でもない、只一つの名譽である。即ち目に見えぬ物を心に知る事、或は善き友を持てるとか、或は人より親切なり、同情あつき方と認めて賞賛せらるゝが如き、是ぞ誠の寶である。それ故に人間たる者は此手で採り得らるゝ物を持てるよりか、目に見えざる物の力の尊き事を幼き子供の頭の中に入れる事が肝要であるといふ事を「フレーベル」氏が世の母たる者に教示したのであります。

たゞひとり、世に住む者との觀念を、幼な心に起さすな、世界の中の一人にて、さまゝかはる生涯の、其一部分ぞと知らしめよ、外にあらはる現象を、通して内にひそまれる、眞理までをも見せしめよ、童の眼を誘ふなる、遠く遙けき眺こそ、そが心をばいと深く、感動せしむるものにして、外の耳には聞えぬも、心の耳には解せらる、譬喩となりて種々の、貴き教を語るなれ、かゝる教の言の葉を、解する子供は樂しくも、又しづかにも生涯を、幸ひ得てぞ送らまし、

これは總ての現象を子供に見聞きせしめて、後には其外部の目や耳で見聞きする事の出來ぬ、大眞理を心の中に秘めさすことの必要を、說いたのであります。

終に臨んで以上御話した事の爲め私の幼稚園で、實際遣つて居りまするこを御話しまして、今日の會を終へませう。

私の練習所では月に就いては月を愛する歌があり、又是に伴ふ動作もあります。それから光に就いては人造の光、天然の光の區別を實地に觀察させます。

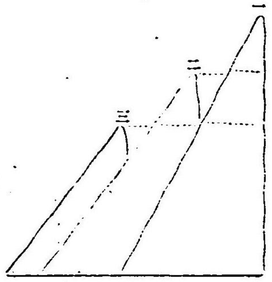
先づ人造の光に就いては、蠟燭の火をともし、或は其作方を話し。次ぎは提燈に就て、次は行燈に就いて、次は油種燈心に就いて、遊戯もし、又話しもする、之れか段々進歩して、「ランプ」となれば、此處石油を採る事などに及び、一層進歩し瓦斯燈や、電氣燈の時代となつたと云ふやうに話します。是等は皆人造の光であつて、更に其上は天然の光、即ち太陽は晝を照らし、太陰は夜を主る、其日月の光の如何に大なる神の力であるかに由り、一は人造の光であつて、一は天然の光である事を知らしめます、後に蠟燭と行燈、行燈と提燈、「ランプ」と電氣燈、日と月、月と星と云ふ樣に組み合せて縫ひ採をさせます、斯樣にして天然の光と、人造の光とを明にします。

第十講　幼稚園に於ての規則と秩序、自由理想の幼稚園

今日は幼稚園の掟と秩序と云ふ題目で御話を致しませう、

扨て世の幼稚園を見渡しますと、餘りに掟々と云ふて規律固めのもあり、又全く是と相反し、餘りに自由の過ぎるのもあります。此前の掟固めの方は、此貴重なる保育の事業が掟の奴隷となつて居り、後の方は自由の下部となつて居る。是は何れも極端であつて、餘り感心は出來ません、此掟なる者は世界の何物にも認められますが、此掟に從ふて始めて眞の自由が出で來る、故に掟を離れて自由と云ふ者は無いのであります。今宇宙の掟と云ふことから話しませうが、是に自然、肉体、智識、靈界の四つに就いて申し上げませう。今世界の或物を學ぶにも必ず掟てふ者がある、此世界の掟が判つたならば、自分が主人となつたのであるが、

是に反して掟が判らぬ者は、自分が掟の奴隷となつたのでる。又今博覽會などを參觀し、或は北海道札幌の農學校などに行くと、澤山北海道の農產物を見る事が出來ますが、それに就き私はこんな表を見ました。



この表は其農產物の出來映を比較したものであつて、結局り農夫が物を作るには溫度を適當にするとか、或は時候を考ふるとか、或は土地を擇ぶとか、肥料や水に就いても色々注意すると云ふが如き掟がある。此掟に從ひて作れば、作物よく出來て、收穫も多い、之に反して掟に從はぬ時は結果は反對となる。即ち掟どほりに作れば、此表の一のやうに高度の出來映を示し、それより二三と云ふ樣に段々と、其出來映は下るのであります。

昨日も本會役員の御案內で、當校の建物を參觀致しましたが、其內部の總ての構造の、よく注意の周到なる事、上にも下にも窓あり、口あり、其他換氣、採光、一として缺點はありませぬ。さて何の爲め斯く迄御注意があるのでせうか、生徒諸子の爲め强健なる身體が必要であるからでせう、若しも換氣採光の方が備つて居ないとしたら、如何でせう、生徒の体を害する事どれ程でせう、結局り靑い顏や近視眼の方が多くなつて、如何に萬卷の書を諳ずるも、何の詮もないことゝなる、又皆さんの姿勢を見ますと、中には背の曲れる方もありますが、さて此姿勢を正しくせよといふ事は、何人も喧しく申しますが、それは何故でせう、姿勢の正しからぬところからは、色々なる病的を來すからでありませう、是れで人間の身体にも掟があつて、此掟に從ふて行かば、其体力は强健となり、掟に反したならば其体力は虛弱となる事は明かであります。其外地球にせよ、太陽にせよ、月にせよ、星にせよ、總て天體間には一定の掟があつて、運行して居ります。或は一國で申しましても、政府には定りた掟があり、社會にも一定の掟があつて、それぞれ成立つて行くので、然して其掟に從つて行くところから、眞正の自由なる者が出で來るので、結局り掟の上に眞の自由は有るので、普通の人の考ふる樣に掟あるが爲めに自由を失ふと云ふ事は無いのであります。

今爰に二軒の家があつて、甲の家は仕事をするにも、食事をするにも、寐るも、起きるも、出るも、入るも、總ての事に秩序があつたとすれば如何でせう、母も、主人も、子供も、下婢も、皆安心して暮すことが出來る。然るに是に反して、乙なる家には總ての事に秩序が無いとしたら、衣物一枚着るのにも狼狽せねばならぬと云ふ始末で、迚も一家族の者が安心して暮すことは出來ぬ、要するに一方掟に從ふ方は自由であるが、一方は大に不安全であると云ふ結果が見える。扨て只今迄に申し上げし事に由り、總て掟に從ふ者は自由を得るといふ點を御考へになつたら、自由といふ事の眞正の意味は、那邊にあるかを御了解になつたでせう。扨て斯樣の次第であるから、最初此地球が火と水とで有つた時代から、段々と變化して爰に天體と地球との間に一定の掟を生じ遂に此掟が人間に到りて、そこで人間が此掟に從つて、水の上には蒸汽船を馳せ、陸の上には電氣を通じ、其他美術的の考案に至る迄、總て自由自在に物を作る樣になつた。

次に幼稚園の掟に就いて、實際上の事に說き及しまして本題の結末を付けませう。

「フレーベル」氏は自分の幼稚園に掟を作り、此掟に由りて眞の自由は得らるゝ者であると信じたのであります。其故に幼稚園に用ふる恩物に就いて考へましても、先づ簡單より複雜に入ると云ふ掟よりして、先づ最初は六個の玉に始まりて、其より第二恩物は三つの体、第三は積木と云ふ樣に組織が立つて居る、又手藝にしても其通りで、ちやんと線が引いてあつて、又色紙は此線に適する樣に切つてある。斯くして總ての事が秩序正しく出來て居るから、之れを使ふに自由である。子供は此掟に從ふて課事をして行き、遂には彼等が自由に工夫して遣る樣になる。子供の活用は、眞に驚くべき事を遣ります。是れ恰も大美術家が、技術上の一大意匠を案出したのと同樣であつて、子供の境涯としては、實に一大發明をしたのである。此處に至りて始めて彼等は自由なる物を得たのである。又遊戲をする時に子供は皆輪を作りて爲る「フレーベル」氏は此輪の中へ自由を投げ込み置きて、そして此輪の掟に從ふ者は此自由を得るのであると云ふ樣に仕向けたのである、からに母の本にも掟のもとに遊戲を爲る樣に土臺を置いてあります。

扨て爰に三つの幼稚園がある一は掟に過ぎ、二は自由に失し、三は自由と掟とを調和して所謂理想的の幼稚園。私が見た或幼稚園の中に先生は机に寄りて眞面目な顔で斯う遣つて、(此時講師は机に寄り其狀を實演せり)園兒も又ちやんと斯うやつて、蛇に白眼れた蛙みた樣にして課事をして居た、誠に一見靜肅でよい樣にあつたが、然し彼等は毫も活動しては居ませんでした、それから室を出る時には兵式的に事も嚴重に引き出した、外に出てからどうするかと見て居ましたが、彼等はぢつとして走る事もせず、飛びもせず、毫も兒童の本性を現はしませぬ。

さて其から遊戯を爲る事となつた、處が子供は內心から興味を覺えて遣つて居る樣子は、藥にする程も見えぬ、鳥が上に飛ぶ狀をして居る事はして居るが、眞に鳥が立つの勇氣がない、扨て斯樣な有狀で活動すべき時に活動せず、喜ぶべき時に喜ばず、勇むべき場合に勇みもせで、殆ど活氣が無い、さあ皆さん此處が注意すべき點である。彼等の靜肅は眞の靜肅でせうか、彼等に活氣なきは何等の故でせう、彼等が興味を感じないはなぜでせうか、是等は大に研究すべき價値がありはせぬかと思ひます。

此幼稚園は彼も掟、是も掟と、一も二もなく掟責にして、彼等の自由を束縛し、彼等の活動性の利用を無視したる現象であつて、私どもは眞の自由を此間に認めませぬ、かゝる幼稚園は平に御斷りであります。

又或時、練習生を連れて或幼稚園を參觀したが、其園長の說には、子供と云ふ者は掟の下に置いてはならぬ、自由でなくてはならぬと言ふて居られましたが、園長さんの案內に由りて、室に入りて見たが、子供は積木をして居たが、中には何事もせで、漠然として居る子供もあれば、手を延ばして人を突くもあり、或は泣くあれば怒るもあり、或は少しく物を作れる子供もありましたが、一体に樂しい樣子が見えぬ、私はそこで、早く此室を去つた、又此園長の話に恩物などは「クレーベル」氏の恩物は餘り必要でない、私の處は自由的恩物であると言はれましたで、其恩物を見たが、成程種々雜多の玩物がありました、爰をし去つて此度は遊戯室を見ましたが、中々喧々噪々、園長さんの言葉も斯うやつて耳を寄せても、聞き取る事の出來ぬ程でありました。遂に私は練習生を連れて歸りました。こゝが又皆さん研究ものである。斯樣に放任するのが眞の自由であるか、どうか、又斯うやつて保育した結果はどうであるか。これぞ、眞の自由なる者を誤解した現象であつて、園長さんの話のやうに、餘り此自由は自慢らしくは思はれぬ。

以上御話した幼稚園は、何れも正しい者とは思はれませぬ、要するに餘り放任主義も感心しないが、自由主義も褒められません、保育事業には必ず掟が無くてはならぬ。其掟の精神は子供の從順を得る事である、然して後には子供の方より秩序に從ふは愉快である、順序に從ふは面白いと云ふところから、最後に掟に從ふが眞の自由であると云ふ考より、彼等自動自發して、掟に服從するに至らしむるを期せねばなりませぬ、これぞ私どもの主張する理想的幼稚園の主義であります。

前回にも、一寸申し上げし如く、私などの幼稚園では新入の園兒の附添を除いてしまいます。一昨年の四月に二十人の新しき子供が入園した時、母とか、祖母とか、姉とか、下女とか、大抵附添人がありました。そこで私は眞先にあなた方お氣の毒ですが、皆除いて下さいと言つて離してしまいました、そこで母親も祖母たちも、不安心ながらも廊下に出てしまいました、ところがさあ二十人の子供がわんわん泣き出した、そこで附添人は非常に心配して、ちよーど子供を殺しでもするかと思ふた樣子であつた。しかし多くの練習生がありますから、一人の子供に一人宛つけて、或は庭に連れ行き、花を見せ、或は繪を見せ、色々にして賺して機嫌をとつて居りましたが、遂に泣も止みて、遊戯室に歸ることゝなつた。そこで一人宛、母なり、祖母なりを、案內して子供の落付いて居る狀を見せましたら、成程えらい者ですなと言つて、初めて安心した樣子であつた。斯くして二日三日辛抱したが、遂には子供は先生に懷きまして、それで治める事が出來たが、若しも私が初め子供の泣いた時これはしかたがないと言つて、あなたも御一所に、あなたもと、附添人を室に入れたら、どーでせう、一月立ちても二月三月立つても、斯樣に治める事は難しい。

それ故何でも幼稚園には先づ掟が無くてはならぬ、其掟に從順であつたら、眞の自由が得られるのでありま

す。

第十一講　道德上の遊戯

今日は母の本のお話をする代りに、幼稚園の實地に就き其一般を申し上げやうと思ひます。爰に道德に關する敎練に就いての歌がありますで、お寫しになつてもよろしい。

先づ幼稚園に於て、園兒の附添を如何に取扱ふべきかに就きお話し致しますが、其規則として附添はそこらにうろつかさぬと云ふことを申して置きます。今附添を室內へ入れますと、子供の後へ來て、あーしなさい、こーしなさいと、餘りに世話をする處から、兒童其物が自分で自分の事を爲るといふ、自動的の敎練が出來ぬ事となりますから、附添を入れる事は、百害は在つても一益は無い、其故私の處では、附添人は母であらうが、乳母であらうが、一人も室內へは入れぬ事として居ます、只に室內に入れぬのみではない、廊下からも覗かしませぬ、あなた方は氣の毒ながら、控所へいつて下さいと、いつて別室へ遣つてしまいます。一体日本の人は遠慮が過ぎる傾がある。然し此遠慮も時と場合とを考へて爲るがよろしい、斯う言へば、若も彼の人の感情を害しはしないか、あー言ふたらあの人の氣色を損しはしないかと、いらざる事に遠慮して、言ふべき事を言はぬと云ふのは餘り感心しないです、附添人にあちらへいつて下さいと云ふのは、正當の要求であるから、何にも毫も心を置く事はいりませぬ。

又幼稚園に於て、附添人の爲めに規律を亂される場合があります、私の幼稚園で或冬の大變寒き日に、或附添が自分の宅の子供に、今日は寒いから羽織を着せませうといつて、其子に着せに懸りましたから、私は附添に任して置いて、他の室に行きました。其後で附添が如何にすかしても、如何に諭しても其羽織を着ません、そこで附添はほとほと困つて、羽織を持つたなり、立つて居る、處へ私が歸りて來まして、其始末を聞きまして、なぜあなたは羽織を着ませんかと言つて、又他の室へ行きました。又還つて尋ねますと、何としてもお着なさらぬから、仕方が無いと言つたぎり、でありました。又他の室へ行きて、最後にかへつて尋ねますと、餘りに厭がられますから、かはゆそうですから着せませんと言つた、そこで私は此子供を抱きて他室へ連れ行きて、風引きて病氣になりますから、羽織をお着なさいと、言つたところが、子供はわんと聲を擧げて泣いた。しまいの果には、異人さん馬鹿だと云ふて、怒りましたが、然し遂に羽織を着ました。其より後は羽織をすなはに着るやうになりました。結局り是れはこちらが、附添に任したのがわるいので。それから後は大變私と此子供とは仲よくなりました。然し是れは私がまだ附添は一切入れぬと云ふ規則にして居ませなんだ、時の實驗談であります。

又或會集の時、附添が子供の後に來て、うーや、うーや、言ふて子供は後に向ひて居たが、ふと氣が付いて見た處、此附添は此子供の乳母で、今窃に乳を飲ませして居るのであつた、私は是れを見て二つの事を敎へました。卽ち乳を飲す樣なことは、公然遣るべきことではない、又子供が泣くからと言つて乳を與るのはよくない、必ず時を定めて與ふると云ふ樣にするがよいといつて、之れを止めさしました。ところがあの園長さんは、餘り嚴しい、子供に乳を飲すのさへ、許してくれぬといつて、始めの內は怒つたが、後には段々と、其道理が判つて、喜を以て迎ふる樣になつた。

次は然らば、此幼稚園の秩序を保つには、如何に注意すべきかに付、申し上げませう、先づ第一に室の出入に就きて注意せねばならぬ。どーも此出入が中々きちんと行かぬ、中には前の者を突き飛ばすやら、列外へ馳せ去るやら、ぐだぐだに出入すると云ふ事になりますが、是はよくない保姆の理想とすべき事は、ちやんと一列或は二列に列し、眞直になつて出入させねばならぬ。私處の幼稚園にも時には先生の少しの不注意より、全体の不規律を招くことが度々ある。其故先生は子供の前に立つたら、何時も端から端迄全体に眼を配り、何時も先生の視線は我々の頭上にありとの感を持たすべきである。

秩序を保たんには、保姆たる者、朝より夕まで子供の上に注意を止めねばならぬ。若しも是れを離れて、外

に注意が去つたなら、迚も秩序は保たれませぬ。其故、私處の先生方は、子供を預つて居る時間中は中々油斷がなりませぬ。それですから、私の處では土曜と日曜とを休みて、充分に身心の疲れを休めて置いて、他の日には充分勉強させる事にして居ります、是れが私の理想である。

次に机の排列に就いては、可成的皆の子供が顔を見合はす樣に列べるがよい、そうすると先生が全体を管理するのに都合がよろしい、又子供に課事を與ふる時は、全体一時に仕事をさせて、全体を一目の下に管理する樣な注意が必要である。

又子供の前に一つの物を出し、之れに觸りてはならぬと命令したなら、觸りなされと許す迄は、充分の注意を要します。然るに先生が先きの命令を忘れてしまい、何時まで立つても許さぬ時は、子供も先きの命令を忘れてしまい、遂に手を觸れて、此命令を打毀す樣になる、是れ全く一の命令を出して、其後の注意が足りないが爲めであります。そして一人の子供が秩序を破りし處から、我も我もと皆の者が秩序を毀す事となつたら、非常な事となります。其故、かゝる弊のなからん爲めには、手を觸れた時は氣の毒ながらこちらへお出しなさいと、言つて採上げて、屹度命令を行ふて行く、又子供に仕事を與ふるも、斯うやつて先生が子供に背を見せて、置いて次ぎ次ぎに仕事を與へると云ふ樣な事はせぬやうにして、必ず子供全体を認めて居る事が必要であります。

それから、遊戯の時、最も奇麗なのは、周圍にちやんと立ちて、眞直にして居るのは奇麗ですが、中々、そう、きちつと、ゆかぬ、或は前の子供を突く、引張る、或は据る、ぐにや、ぐにやになつて遊戯して居るのを見る事がある。斯くては眞の幼稚園の遊戯ではない、これが若も先生の不注意であれば、充分注意して本氣で遣るべき時には遣り、又遊ぶべき時に遊ぶといふ樣に、常に方針を向けていつたならば、そこに奇麗な遊戯が出來ると思ひます。

以上申しました、室の出入と、仕事を與ふる時の順序と、遊戯の際、秩序を保つと云ふ、此三つの事に注意して行つて、此三つの事が甘く秩序を保つことが出來たならば、餘の事は自ら成功を擧ぐる事は疑はない。

今一つの注意は、保姆一人が受持つ兒童數の事であります。是れは可成的、人數を少くする方の利益ある事は何人も異論はありますまい、彼の朝顔を作り立てるでさへ、或は日光の事、肥料、手入、水分の事、どれ程、一本の朝顔に就いても心を用ひねば、充分なる花を見る事は出來ぬ。然るに一人にて、七十本位の朝顔を培養したならば、其手間の懸るが爲め、其人は役所へも、會社へも、出て働く時間は無い程でありませう、ですから、一人の保姆で、多くの園兒を取扱ふ事は餘程至難の業であります。先づ私の理想としては、一人が十六名ぐらゐを受持つのが、最多限と思ひます。

今度は幼稚園の衛生に就き申し上げましよう。

此清潔に爲る事は、子供の方も、先生の方も、注意せねばならぬ事で、結局り此事は感情に關係するし、又道德に關係します。「フレーベル」氏も、意志を養ふ前に、感情を養へと云ひました。先づ幼稚園の實際で申しますと、窓も奇麗に拭ひ、曇りのないやうにし、床も光澤ある程に拭ふと云ふやうに、總て掃除を綿密にせねばならぬ。然し是れは小使が遣らねば、自分が其だけの事は必ず爲る。又押込、戸棚の中も規律立てゝ整理する事にも、注意せねばなりませぬ。

次に、幼稚園の美と云ふ事に就いて申しますが。

室内の飾りは、成たけ色の調和を尙びます。壁の色なども、此教室のやうな色がよろしい、又疊紙や折紙を、色の調和をも考へず、無闇に壁上などに張つてあるのは、決して奇麗なとは言はれませぬ。若し是等の者を飾るならば、一色がよい、一体日本の色紙は、餘り色が濃さに過ぎる、私などの處では、總て薄色を使用します。

額などを爲る時は、紫色を使ふとせば、薄紫がよいと思ひます。又部屋を飾るなれば、綠色がよろしい、決して赤色などは使ふてはなりませぬ。結局り異色を數多く使ふよりか、何か一色を選びて使ふた方がよろし

い。

それでよく色々に色どりた繪を無闇に壁などに懸けてあるのを見ますが、彼れは餘り感心しませぬ。先づかけるなれば、一枚でも宜しいから、最佳良なる繪を懸けるがよろしい、今此教室にしても何か色々の額がかかつて居たならば、目障りとなつて却てよくありませぬ。

又花などを挿して置く事は、美の感情を養ふ上より云ふもよい事であるが、私なども、必ず何か一寸とした花を「オルガン」の此處に、何時も置きまして、時々新しき花と挿し易へます。そうすると子供は、よく此花に注意する處から、美的感情を養ふ事が出來ます。然し其花瓶も餘りに、立派に飾り物の就いた物や、價の高い物は、よくありませぬ。價の安い鳥渡した花瓶へ、花も餘りひつこくない、鳥渡した花を挿して置くがよろしい。

今一つ美を養ふ者は、黑板である。私の處などには、師範學校の圖畫の教師を頼みまして、春なら花、夏なら船、秋なら楓と云ふやうに時に適したる繪を書いて貰ひます。そうして置くと美感を養生することも出來、又參觀人なども一番に此黑板に注意する、斯うやつて始終黑板を利用します。

以上申し上げた如く、出來がたい事を奇麗に成功させ樣と思ひましたら、何事も秩序正しく、そして清潔で、美を養ふといふ事により、彼等に清く正しき考へを保たしむることを、七歳の頃迄に遣らねばならぬと「フレーベル」氏は申しました。

もう、一つは勤勉であります。之れは子供を充分に働かす事で、課業の間は一生懸命にさせる、若しも此間に不行儀の者や、懶け者があるのは、屹度先生の注意が足らぬ故である。卽ち先生の方に過がある。其落度に由りて子供に怠心が起るのであるから、充分に此點に注意して、先づ一事ある毎に、己を反省するといふ樣に遣つたならば、子供の勤勉は望まいでも得らるゝのでありませう。

今一つは子供は課業の間は、外部に對しては無意識である樣になくてはなりませぬ、今室內へ他人が入りて來ましても是れに注意を引かれない樣、無頓着であると云ふ事が大切であります。

終に臨んでもう一つ、よく何處の幼稚園にも遣る事ですが、開園式などの時、話をよく爲る子供を選び、一生懸命に面白い話をさして他の子供は手を打ちて笑ひだすと云ふ樣なる事を爲まするが、是れは此子一人だけの神經を過度に刺戟しまするから、決して子供に爲しむる事でありませぬ。

神戸幼稚園保姆和久山さと嬢講述

本講述も明治三十六年八月私立岡山縣教育會夏期講習會開催の節述べられしものにして專ら米人「ハリソン」氏の著書により講話せられしものなり

第一講　幼稚園遊戯

扨て今日より私が御話する事は、私の作話でもなく、私の考でもなく、即ち米國の或地方で永く保育に從事して居られます御方が、書かれた書物を紹介するのであつて、且つそれが利益が多くはあるまいかと思ふのです。是れは米國の「ウヰギンス」の譯書であります。先づ第一に遊戯と云ふ事は實際的にも研究し、或は比論的にも研究することが必要と思ひますが、先づ幼稚園遊戯と云ふことに就き、此書物に現はれし事を御紹介致します。彼の「フレーベル」氏は斯う言ふた、凡ての子供は男も女も先づ遊戯をするが、此無邪氣の遊戯の中に彼等將來の有樣は現はれて居るといつた。然して幼稚園にて行ふ遊戯には音樂をも必要とするが、詳論すれば、教育の爲めにも用ゐられて居る。又身体を發育せしむるが爲めにも用ゐられて居る。或は感情を養成するが爲めにも用ゐられて居る。或は禮儀作法を教ふるが爲めにも用ゐられて居る。然るに「フレーベル」氏は遊戯なる者は、彼等兒童の自然の活動力を發展し、且つ彼等の能力を養成し、天賦の性を發達するに如何に應用すべきかをいふて居られます。

そこで遊戯は美術なり禮儀なり總て實際的に遣らして始めて遊戯の價値を生ずるのである。其遊戯の價値に就きては前「フレーベル」氏の言の如く此遊戯と云へる中に彼等兒童の一生涯を意味して居る。即ち兒童が自然に行ふ處の動作の些かたりとも、決して等閑視す可きに非らず。實に彼等が將來如何なる人間となるかの萠芽を含んで居るのである。約言すれば、人間と云ふ事は、遊戯の中にありと云ふのである。扨て其幼稚園

遊戯に就き爰に數個の說があります、第一に遊戯は肉体の發達のみを目的とするには非らず、實に精神の發達と大なる關係がある。第二に遊戯は兒童彼等が他日社會生活をなす準備となるのである。第三に遊戯に由りて世界の種々なる物を知る。即ち家族の關係を知り、鳥、蝶、魚、貝に付きての種々なる知識を得。然し其收得する知識の度合は、兎に角彼等が他日種々なる敎育の階段に於て、收むる大知識の階梯となるのである。第四に兒童の思想を明確にし、好奇心とか求知心とか云ふが如き、心情を養成する事が出來る。第五に兒童は遊戯に由りて己といふ觀念が確實となり、且つ遊戯に於て種々なる事を眞似て遣るところから、自他の區別を了解するに至る。第六に兒童は遊戯に對する興味を生じ、遂に愉快なる遊戯に服從するに至り、總て服從と云ふ慣習を得る事となる。第七に以上の結果として、他日兒童が社會の一分子として、完全なる國民として、差支なき程の人を作るの準備となる。第八には遊戯をすると共に動物、植物、其他、人の生活の狀態に關する唱歌も歌ひ、且つ天然物に關する遊戯もする、或は宇宙に關する歌をも唱へ、斯くして彼等は自己も人間に關したるものなる事を悟り、自分も自然物の一つなる事より、己れも造物主の賜なる事を知る、即ち己は自然の子供であつて、且つ人間の子供で、而も神の子供である事を知る樣になります。

次に、此結果に就き著者自分の意見を述べて居られます。即ち遊戯によりて兒童は種々の言語を學び、思想も發達し、或は身振に由りて、種々なる事の表出をなし、或は唱歌の韻律に由りて、心中に種々なる美を感するに至る。要言すれば兒童は言語、思想、韻律、身振等に由り、他日に至り、智育、体育、德育の三育を施すに適當なる素地を作るに至るのであります。

次には、唱歌遊戯の根源如何と云ふ事である。即ち其根源は、兒童の自然に發する遊戯となりて、起るのである。且つ幼兒が自然に發する言語は、自ら一の唱歌をなして居る。且つ幼兒の凡ての動作は、自ら遊戯をなして居るのであります。「フレーベル」氏は子供の遊戯は、彼等の境涯より自ら現れ出づる者であると云ふ事を、其著書、母の本に書いてある、然して母の本の中に書いてある遊戯法の如きは、總て彼等兒童が即ち理想國民として將來歩まざる可らざる事に由りて案出せられた者である然し、此母の本の中にある遊戯法とか、原理とかを其儘に採りて行ふ時は、或は過を釀すやも計りがたい、故に何か或一定の標準によりて採りて行ふがよいと思ひます。即ち畫を學ぶとしても、始めは一本の棒を引くにも、先生が縱に、横に、斜に、引かば、全然之れに摸擬して、可成的之れに倣はんとするが、然し段々と畫に就きての知識を得て種々なる工夫畫を畫くに及んでは、遂には一定の定規を離れて、種々に活用するに至るが如く、保育の事も先づ原理を基礎とし、或は兒童の境遇、周圍の狀、或は時代の狀、或は兒童發達の程度、其他種々なる事情に由り、是に應合するが如く、臨機の活用こそ、望ましき事である。要するに保姆自身の經驗と理想と相一致するに至りて、初めて其活用の妙があるのである。

次に兒童に遊戯を課するに、當りては、充分に彼等に同情を表するは勿論、又餘り新奇なる遊戯にのみ走る事は、保姆の必ず爲すまじき事であつて、即ち一の新奇なる遊戯のある毎に、先づ充分自分の理想と經驗に訴へ、其一致調和せる後に至りて、爰に始めて採用すべきであります。

次に唱歌遊戯の種類と、分類と云ふ事でありますが、今其一班をあげますと、先づ家族に關するもの、商工業に關するもの、五感に關するもの、天然の活物に關するもの、恩物に係るもの、手藝にかゝるもの、体操作法に伴ふもの、朝夕の禮に關係する者、國の祝に就きてのもの、日月星辰の如き自然の現象に關してのもの、社會にかゝはるもの、其他即席に出來たる遊戯、唱歌等である扨て斯く多數の遊戯唱歌を餘り、あれも、これもと一時に行ふのは宜しくはない、即ち時と場合とにより、或は子供の境涯、發達の如何、或は彼等の嗜好等に由り、充分なる取捨撰擇の末、採用すべきものゝらは之れを採ると云ふやうにすべきであります。

さて其遊戯を課するに當りては、無理に先生より强ふるのは宜しくない、可成的、彼等自ら働きて、先生は單に之れを指導するに止る樣に遣るべきであります。然し是れは餘程困難である。即ち子供が選んだ遊戯が、先生の豫定と合しないと云ふ場合も起る。是に就きては「ブロー」女が云つた事がある。總ての人間は、一つ

の定まりたる道を自由に歩むと云はれましたが、これぞ人間の眞理を言ひ盡して居る、ゆゑに、遊戯の時は、先生自分も子供の一人と云ふ考を以て居て、何事も自己を彼等の境遇に置きて行くと云ふ事が、必要である。そこで遊戯の如きも、是れより是れ迄と何か一定の範圍を定めて、其範圍内に於て、兒童彼等をして自由に活動せしむる如く仕向くることが、緊要である。故に遊戯には壓制主義をやらないで、子供が遊戯せるに當りては、是れが保姆たる者は、今彼等は自由に遊びつゝあるか、或は先生より强ひては居ないか、又子供は内心より興味を覺えて從ひ來たれりや、或は先生の命令止むを得ず從ひ來るには非らざるかと云ふ事を、見拔くだけの眼がなくてはならぬ。然しこゝに云ふ自由と云ふ事は、放任的の自由と云ふ意味ではなくて、即ち或一定の範圍内に於ての自由と云ふ意味であります。之れが即ち遊戯の自由と言ふ事で、可成的兒童彼等をして、自發活動する事を得るの自由を與へて置かねばならぬのであります。

次に遊戯の一致共同と云ふ事であります、彼の一團の兒童が輪を作ると云ふ事は、即ち此遊戯の一致協力の眞理を現はせる者であります。然して世の保姆だちがよくやる如く彼の子は怜悧であるからとか、或は年が大きいからとか云ふて、今日も明日もいつも〳〵、或一部の子供にのみ、一定の役を與ふるが如きは、必ず避くべきである。それでは一致協力と云ふ點が缺げて來る。そこで保姆は、年かさといはず、年少といはず、富者の子弟と言はず、貧者のと云はず、或は性質の良否如何に抱らず、總て一方に偏する事を避け、最も公平に、然も普偏的に遣るの心懸が、必要であります。扨て今爰に一團の子供が、一つの遊戯を成さんとするに當り、其中の一人の子供が此遊戯を好まないところから、頑固に先生の命令を奉じない事があると、遂には此子一人の爲め、全体の子供が遊戯に對する興味を減殺し、遂に折角の催も中止するに至る事があります。かゝる場合に當り、總て自分は少々好ましくないとも、まげて他人の爲めに共同してやる事が大切であると云ふ事をよくよく悟らしめねばなりませぬ。爰が即ち幼稚園保育の價値の存する處で、彼等が他日社會の一分子たるに及んで、己も社會の一員たる以上は、己の利益を割いても國家社會に一致協力するに至るの素地をなすのであります。

次は遊戯には身振と云ふ事が大切である。兒童は種々なる身振によりて、唱歌の意味、遊戯の性質を了解するに至るのである。次に偶發的遊戯と云ふ事は面白い事であります。即ち兒童彼等が牛の田畑を耕耘せる、狀を見て、直に之れを眞似し、或は雁の連れて飛び行けるを見て、之れを摸し、或は汽車が快走せる狀を見て、直に之れを眞似んとするが如く、總て彼等が實地に見聞せる事を、直に眞似んとする事がありますが、然し此場合に於ては、未だ歌もなく言語も無い、そこで保姆たる者は、斯る兒童が案出せる即席遊戯をば等閑視せず、或は之れに適當の歌を與へ、言語を示して、彼等をして益々愉快に實演せしむるやうに指導するのが肝要であります。

最後に遊戯の訓練に就き御話しますが、前にも申しました如く、遊戯には一致といふ事が行はれねばならぬ。此一致といへる事は教師が無理に强ふとて得べき者ではない、即ち前に言ひし自由の中に眞の一致を得らるるもので、無理に强行に一致を得んと望まば、却て面白くない結果を來します。然し此一事は保育上最も切要の點でもあるが、同時に最も困難なる點であります、諸君が常に經驗するが如く、或子供は前の者を突き飛ばす、前の者は後の子供を蹴りかへす、或は左に走り右に馳せ、殆ど底止する處を知らずと云ふが如き、子供もある處から、保姆はそれ何して居ますか、どこ向きますか、なぜ人を突きますか、なぜ立たないですかと、いつて、屢管理的の言語を用ふるの止むを得ぬに至つて、遂には一致を缺ぐと云ふ事も履ある、然しかゝる時に當りて、世の保姆たる者、決して落膽してはならない、彼の太陽でさへ、時には黑雲の掩ふ事もあれば、かゝる不幸の日を迎ふるとも、益々是等に就き充分なる研究と忍耐とを以て、宜しく活氣を求むる事を勤めて、他日の成功を得る事を心懸けねばならぬ。最後に遊戯の結果といへることに就きて言ふて有るが、之れは前々御話した事を要約してあるに過ぎないので、即ち遊戯といへる事は人間の生涯を現はしたる者で、世の普通の人は幼兒の遊戯を見て、之れに對し餘り價値を拂はないが、若しも此子供の遊が如何に貴

重なる者で、如何に眞理を含めるかといふことを知る事を得たならば、かゝる人は人間の幸福を得て、遊戯なるものは、決して肉体の練習のみでなくて、實に精神の發達德性の敎養に至大の關係あることを知了するに至るのである。故に人間の幸福なる將來を希ふ者は、此幼兒遊戯の實價如何といへる事を研究するの要があります。

第二講　自然界の研究

今日は自然界の研究といふ事に就いて、「ウイギンス」の說の大要を御話します。其說に由ると、先づ自然界の研究をさせやうと思へば、兒童をして多くの動植物に接近せしむるがよからう、彼の有名なる大詩人「ロングフエロー」が言つた言葉がある。汝は未だ汝の足の踏み入らざるの地に於て、神の與へ給へる言葉を讀めよと言つた。是れ卽ち自然界の研究の必要なる事を言つたのであります。然して幼稚園に於ける自然界の研究は、如何なる程度迄やるべきか、及其方法は如何と、此二つに就きては、世に種々の議論はあるが、兎に角自然界の研究をやると云ふ點に於ては異論はない。

「ウキギンス」氏の考では、幼稚園に於ける自然界の研究は、彼等兒童をして直接に觀察せしむるがよい、然し地質學とか、結晶學とか、礦物學とか、云ふが如きは困難で、迚も兒童には難かしい、故に自然物の中で先づ生物に近づかしむるがよい、そして、生物と生物の關係如何、自分と他の生物とは如何なる關連がある かに就き、兒童彼等をして直接に研究せしむるがよろしい、彼の地質とか、礦物とかいふに至りては、彼等が觀察するも、其生命の現象が自分等の現象と一致しないから、其中の眞理を採る事が出來ぬ。然るに、生物を自由に觀察せしむる時は、己れの鏡に生物の命がうつり、又己の生命が生物に相映じ、互に相反應して、遂に生命といふ一定の眞理を發見して、益此等に對する興味と愛とを得るに至ります。然し、單に生物のみで、他の物理とか、結晶の如きは絕對的にやらぬかと云へば、決してそうでは無い、子供は雪が降り、雨が降り、霰が降るにつけては、なぜあんな綿のやうなものが降るであらう、あの水はいづこに居つたであらうかと、種々の疑問を起します。又河のほとりに行きては、小石を見て、なぜ之れはこんなに圓いであらうかと、屹度疑問を起す、そこで斯る時に當り、保姆たる者は、能く注意して餘り高尙なる科學的の答でなくて、極平易に、面白く說き聞かす事が必要である。それ故自然界の事も、餘り困難なる事は此ぐらゐに止めて置きて、先づ科目として置けば、植物動物の手近き物から組織立てゝ遣るがよいと思ひます。

次は自然界研究の目的といふ事であります。卽ち自然界を研究するは、宗敎の爲めであるか、學問の爲めであるか、此二つに就いては、近來議論の生ずる疑點であります。然るに「フレーベル」氏は此二つの者は、互に關連して決して分離する事の成し得ざる事と言ひました。そこで幼稚園では、此二つを區別せず、兩方に關して自然界の研究といふ事を行ふべきであります。

次は、之れを觀察せしむるに當りては、果して何が最近の目的であるかといふ事であります。今子供をして自然界に接せしむるに當りては、總ての物に愛の交通を以て目的とするのである。卽ち總ての物を愛せしむるといふ方に仕向けねばならぬ。そして動物植物を研究せしむるにも、只一度では中々判らない、幾度も幾度も、繰返へして、長く耐忍して遣らねは其中の大なる眞理を發見する事が出來ぬ。兒童彼等が自ら此眞理を捕ふる事を得たならば、之れに興味を持て來る。興味を生ずると、遂には之れを敬ひ、之れを尙びて、益、物を愛するやうになる。從て自然物に對する智識を得て、愈、種々なる疑問を生じ、彼等は熱心に研究して、此疑を解かんとするに至ります。

次に植物なり、動物なりを、今、彼等の目前に提示するに、餘り一時に多くの物を提示するのは、感心せぬ。斯くては彼等の混雜を惹起するのみで、一も得る處は無き結果を來すに止まります。又花ならば花、鳥ならば鳥で、其雄蕊が何本で、花冠が幾枚で、形は如何、或は鳥の羽は如何、嘴はどーと云ふが如き、部分とか、形狀とか、いふが如き、科學的の觀察は遣らいでよろしい、只簡單に何とされいな花ではないか、なんと愛

らしい鳥ではないかと、言つて、其生命より現はるゝ眞理を愛でしむるやうに仕向くるがよろしい。

次は、此目的を達するには如何にするかと云ふ事である、「ジョールジバロス」氏は子供をして自然界に對する愛と興味とを起さしめんには、彼等をして絶えず自然界の中に置き、自然界の空氣を呼吸せしむるより、外は無いと言ひました。卽ち先生より無闇に注入してはならない、彼等自ら其花に就き、此色、此形と云ふやうに、自動的に觀察を遣らせねばならぬ。又秋に至りて實がのると、春の彼の花は今は此實となつたか、此實を蒔けば此木が芽ぶくといふが如く、仕向けたならば、自然界研究の目的は達し得らるゝのであります。私などは、小さな時から、餘り植物などに興味を持たないですが、「ハウ」先生などは非常に植物を愛せられます、冬餘りに寒ければ暖を與へ、或は日光の事から、水をやる事、其培養に心を碎かるゝ事、恰も我子を養育すると毫もかはりは無い程ですが、其に引き易へ、私などは「ハウ」先生から植木に水を遣れといはれますと、其時は水を遣りもするが、二三日たつ中には忘れて居る、すると先生からそれ又水といふやうに注意を受けます、かく十四五年も喧ましく言はれましたから、今では大分氣を付けるやうになりました。是が全く植物に對して興味を持てると、否とで斯ういふ差異を來すのであります。

扨て、子供が動物に對する愛情は、非常なものである。お互は蜥蜴青蟲の如き物を見ると、身がぞんとする、厭らしい氣味がする、蠶などを扱ふ事に慣れない者は、厭らしがりて飼育の世話が出來ぬ、然るに子供は是等のものを厭なとも、何とも思はないで、彼等は嬉しい、樂しい、愛らしいと云ふ言葉を以て、是に近よつて居る。然るに世の母、保姆だちが、子供が折角愛して居る動物を見て、一口にそんな厭らしい者は捨てゝしまへと言ひ、甚しきに至りては、子供の目前で踏み殺して見するなど、能く遣る事ですが、之れは教育上大によろしくない、若し子供が持てる動物が眞に害毒ある者であらば、靜に其害ある所以を說き聞かすがよろしい、斯る遣り方は實に母たる者、保姆たる者の大に耻とすべき事で、如何なる場合にも惡い穢いの語を以て、あたら彼等の興味を減殺せぬやうに心掛けねばなりませぬ。先頃も私の所の子供が、會集の際、一人の子供が窃に一匹の虫を出して床の上を這はして樂しみて居ました。そこで私がそれは何ですかと言つて採りあげました、ところが他の子供が私も私もと言つて、各々其懷より取り出しました。そこで私は一個の水入の玻璃器の中に入れて、先生が預つて置くと言つて、机上に置きましたが、後でよく〳〵驗べたところ、是は子供が小川に行きて捉へ來た、田鼈と云ふ虫でありました。又或一人の園兒は、庭へ行きましたら、必ず何か小さな虫か、何か動物を採り來つて、先生是は何ですかと尋ねます。多分此子は成長の後動物學者になるであらうと思ひます。斯く迄、彼等は動物を愛します。此點に就きては、米國の子供も、我國のも、別に變りはない、其次には子供と云ふ者は、植物などを愛すると、同時に其植物の生存せる土地を愛し、或は動物を愛すると、同時に其動物の生息せる土地を愛するものであります。其故に子供は屈みて居たら、何して居るかと云へば、屹度土を掘り、山を築き、池を作り、木を植えて居る。是が彼等の土地に興味を持つて居る證據であります。

又幼稚園などでは、何か植物の種を蒔いて、是に花を咲かせ、實をならして、種を蒔けば斯る結果があるといふことを現實に知らしめて、生產力の尙ぶべき所以を知らしむる事も必要である。彼の「フレーベル」氏は、植物を好み何につけ、彼に付け、植物には注意せられました、昨日の「ハウ」先生の講話中にありしが如く、「フレーベル」氏は、一時は兵士となつて居られましたが、其時他の兵と共に、或一つの山を越えたが、此時、フ氏は崖を攀ぢ、谷に下りつゝも、各種の植物を採集して、一隊の休憩の間には、窃に之れを取り出して、獨り窃かに研究したとの事である。是を以て推して見ても、フ氏が如何に植物を愛して居られたかと云ふ事は判ります。其故に、フ氏自分の部屋などには、必ず幾多の植物を培養して居られました。又其著書には屹度植物が畫いてある。そこで生徒だちが、フ氏の歡迎會など遣る時は、必ず多くの植物を集めて、飾付を遣つたそうであります。自分がそのくらゐであるから、「フレーベル」氏の幼稚園では、兒童自分に種を蒔かして、自分で培養させ、自分で結果を認めさすといふ樣に教育したのであります。

扱て、斯うやつて、兒童をして自動的に遣らしますと、其種が芽となり、莖となり、葉となり、花となり、實となる間には、何か一のかくれたる掟に從つて出來て居る事を發見する。猶彼等自らの働きの結果を認むるからに、一層滿足する。今皆さん方の幼稚園で、小さな植物園でもお作りになるならば、斯樣なものがよいでせう。

餘り珍しき植物のみはよくありません。却て彼等が平素見慣れたもの、又芽の出易きもの、成長の早いもの、さして根を下すもの、花の澤山つくもの、實のなるもの、是等の者を擇ぶがよろしい、又後の利用をも考へねばならぬ。

米國では、日本の幼稚園の如く、廣い庭が無いから種々なる工夫をして、植物を培養します、卽ち「ハウ」先生の御話の如く、窓の下に箱を作りて培養もするが、又別に植物室を設け採光法より暖を與ふる方法も備へて、それで植物を育てます。

又時には海綿に水を浸し、之れにて豆、朝顏の如き植物を培養したり、或は何か陶器の壺などをも用ゐます、斯くすると畑に作りしと同樣に、充分に子供に觀察せしむる事が出來る。私の隣家に非常に家庭の敎育に熱心なる方が在りまして、此方が種々の植物を培養して或時同種の植物を二つ採り一は日陰に置き、一は充分日光を受くる處に置きしに、數日の後、葉の色花の色など大に差異を生じたで、此時子供等を呼びて是れを比較して、太陽の光が如何に植物と關係あるかを敎へたと話して居られました。斯く迄、注意して遣ると六ケ敷事も容易く彼等に知らしむる事が出來ると思ふて感心した次第でありました。諸君のお宅でも植物を子供に觀察させやうと思つたら、此心掛が大切であります。

又前々申しました如く、子供の目前で、動物を苦めたり、或は殺したりすると云ふ事は、親たる者、保姆たる者の戒むべき事で、又動物を觀察さすに、決して科學的研究の如く解剖などの要はない、卽ち愛の方面より研究せしめ、猶よく保護すべき事をも敎へねばならぬ。卽ち動物を取扱ふに、利己的でなく、科學的でなくして、道德的に取扱はすべきであります。植物の如きも解剖的觀察の要はない、只全体の形に就きて研究せしめ、充分生命といへる一つの眞理に同情を表する事を得たならば、それで足れりであります。

扱て、此書物の事どもを委しく申し上げる時間がありませぬで、ほんの其大體を御傳へしましたので、先づ幼稚園で遣る自然界の研究は、斯く爲べきものと云ふ事の大要を御了解になつたら私の滿足である。

第三講　活動の本能卽筋肉の敎練

今日は只今迄の書物と、ちがつて、「ハリソン」といはれる方が御自分から此兒童性質に就き、色々御研究になつた事の書いてある中から、最も判り易くて、而も有益であらうと思ふ處を、ちよい、ちよい、取り撮みて御紹介致しますが、尤も大抵實例が擧げてありますで、夫等の事を申し上げましたならば、兒童と云ふ者は如何に貴い者であるかと云ふ事がお判りになならうと思ひます。

先づ第一は、体育の部であつて、兒童活動の本能、卽ち筋肉の敎練といふ事に就いての御話であります。扱て、兒童なる者は、活動する天性があつて、一寸も靜止しては居らぬ。何か彼等の或部分を働かして居る。是れは生理上より言ひましても斯くあるべき筈である。子供といふ者は身体の發育成長は一時一刻も止む時はない、卽ち兒童の活動は機關が發育を遂げるが爲めの自然の要求であります。

今產れ儘の赤子を見ても、手とか、足とか、どこかを動かします。少しく成長して來ると、頭を擧げんと試みたり、身体を起さんとする、次には這ひまはる、遂に身が自由となれば、物を蹴つて見る、木に登るやら、飛んで落ちも爲る、女の子ならば、鬼ごとして遊ぶと云ふ鹽梅に、絕えず身体を運動させて、活力を試みて居る。此活動は止めんとするも止める譯には行かぬ。そんな事すなと、手を止めて御覽、屹度足を動かす、足を止めたら、屹度頭を動かす、此活動力ありてこそ、人間は發達するのである。此勢力は私どもの尊敬して人間の爲めにかゝる勢力を賜つた神明に向つて感謝すべき筈の者である。然るに折角子供が活動して居る

者を、無闇に抑へ付けんとするは、壓制極まる話で、又是れが爲め、其活動を止むる事は出來ぬのみならず。彼等に惡しき刺戟を與へ、其結果頑固の性質を作るのみである。さらばといふて、之れを自然の儘に放任せんか、其危險や又計られません、そうすると如何にしたら、適當であるかと云ふ問題となる。今爰にわんぱくの子供が何か物を强請つて、やんちやで、やんちやで、しかたが無い時に、母たる者如何に處置を採つたらよいでせう、此時母が其れ彼處にきれいな鳥が居るよ、或はそれより此のお馬がよいと云ふ樣に、何か是を他に導きますと其やんちやも止みます。然るに是れを手を括り、足を括りても、此やんちやを止めんとするは、只に徒勞となるのみでなくて、是が爲め子供の性質を害するのであります。斯くして行くと、子供は喜んで、母の命に從ふ樣になつて、敎育上よき結果を生ずるのであります。それ故に活動も善良なる者は刺戟して行かねばならぬが、其宜しからぬ活動は壓制しないで靜に此活動力の方向轉換、卽ち一つの善良なる道を與へて、此方面に進ましむるが適當の處置と思ひます。

そして最も幼き時は先づ手が活動すると云ふ事を「フレーベル」氏が認めまして、之れに惡しき慣習をつけぬ樣、最も高尙なる方面に活動せしむる樣に注意せよと云ふ事を喧ましく申したのであります。

今爰に、其手を如何に高尙なる方面に活動せしむるかに就て、實例が擧げてあります。先づ斯うして手の指を屈めて置いて、是は愛する母上なり、かくして、次ぎ次ぎに、是は愛する父上なりと、歌ひて親指を起す、是は愛する姉上なり、是は愛する幼兒なりと、云ふ樣、五本の指を一家族に擬へて、五本の指が一致して手の働きが出來ると云ふ點よりして、家族に一致と云ふ事の必要を知らしめ、或は拇指は一家の管理者であつて、餘の指は皆之れに服從すると云ふ事に由り、父は一家の管理者たる所以を知らしめ、其他兄弟姉妹の關係等、色々家族間の關係を知らしむる事が出來ます、そこで子供は成程、是が父で、是が母と云ふ樣に合點して、爰に家族に就いての興味を生ずるに至ります。

然し子供をして、そう何時も活動のみさせて置いてもならぬ、或場合には、之れを靜かにすると云ふ事も必要である。卽ち之は子供を靜肅にする方である。それは斯うして五指を立てゝ置いて、先づ眠れ拇指これ一つで、斯う拇指を屈める、斯くして次ぎ次ぎに、眠れ食指これ二つ、眠れ中指これ三つ、眠れ紅差指これ四つ、眠れ小指これ五つと云ふて悉く指を寐させてしまふ、斯くして言葉も靜に、動作も靜肅に、遂に子供は眞に內心から靜肅になる。

爰に又此事に就き、「ハリソン」氏自身の實驗談が擧げてあります、それは嘗て「ハリソン」氏が指を利用して子供を靜肅にすると云ふ事を御研究になつて居られました矢先、或時、「ハリソン」氏が汽車に乘られました、ところが汽車中、乘合客の中に、年齡二歲ばかりの子供を連れた、一人の母が乘つて居たが、此子供中々わんぱくで、母もほとほと持餘して居たところが、さあ寐る時となつた着物を脫がせうとしたが、中々脫がぬ、寐させうとしても中々寐んので、此母も困り果てゝ居た、之を「ハリソン」氏が御覽になつて、爰が自分が豫て研究して居る處であると御考へになつて、此母に向ひて私が助けましよう、暫く此子を貸して下さいと言つて此子の傍に行き、その指を出して御覽、さあ此拇指が父上ですよ、此食指が母ですよと、次ぎ次ぎに五本の指を一家族に擬へて、說き聞かせ、夫から此一家の者を寐さしませうと云ひて、言葉も、動作も、窮に、眠れ拇指是一つと、次ぎ次ぎに歌ひつゝ指を寐かして爲まい、さあ靜かにせんと起きますよ、確り握つて居るのですぞ、ぞーです、あなたも寐ませんかといつて、遂に寐床に連れ行き、洋服を脫がせて、眠に就かせました、それ限り此子供は手を握つたなり、眞寐入りました、ところで、母は助けられたを喜び、厚く禮を述べたと云ふ、是れは「ハリソン」氏が汽車中での實驗談であります。そこで世の母たり保姆たる者は、子供に對し壓制をやらないで、宜しく適當の方法を見付け出して、よき方面に向はしめねばなりませぬ。然し何時も何時も、此方法を採るのも、又過失を生ずる恐が有ります。卽ち斯くして制する時代と、又制する事の出來ぬ時代とがあります。卽ち子供が己の手足と自分と云ふ者の二つを全く別物に見る樣になる。此處は大に注意せねばならぬ。「ハリソン」氏の幼稚園で或時子供が縫取をして居ました。其中の一人の子供が針

へ絲を通さんとして、あちらに外れ、こちらに外れ、中々穴に絲が通らない、そこで「ハリソン」氏が此子の傍にいつて、あなたの仕事は大變穢ないですと言つたら、子供は透さず之は私がわるいのではない、此手がわるいのですと言つた。そこで「ハリソン」氏が成程わしがわるかつた。結局り子供自身と、手との連絡が付かずに居るから、斯くなるのだと氣が付き、そこで「ハリソン」氏は更に言葉を改めてあなたの仕事を氣を付ける者は何です、卽ち管理せる者は誰れですかと注意を引きました。其支配せる者は矢張あなたでせう、そうすると其手の爲た事は、誰が爲たのですかと云つて、此子に己れの手と云ふ事を合點させました。斯る事は私共も常に實際に經驗する所で、此話は只一人幼兒の話であるが。此中には、世界の大なる眞理を含んで居ます。卽ち正しき方に向ける樣に人間を養成せば、惡しき方は自ら滅することになります。

今、一つ子供の破壞性に就きて、「ハリソン」氏の研究が載せてありますが、

「ハリソン」氏は、初めに此兒童には、如何なる天性があるかを研究して見たいと考へられましたが、總て子供には物を破壞する本能があると云ふ事を認められました。成程子供に人形でも與へますと、毛を毟り、首を拔き、手は手、足は足と、壞してしまふ、或は自分の前垂に、態と穴を明ける、引き裂くと云ふ樣に、玩具でも長く形を保つ者は無い、此れは一寸と考へますと、なぜ神は斯樣な宜しからぬ本能を人間に與へたかと怪しみますが、然しながら、此破壞性ありてこそ、彼等は物の構造を知り、原因結果の關係をも發見するのである、此破壞の時代は批評的時代と云ひます、然し破壞性が天與の本能であるからと云つて是を何時迄も放任して置くかと云へば、そうでは無い、成程破壞も入用ではあるが、一度壞したら又之れを組織すると云ふ方に導かねばならぬ、破壞と云ふ事は美術にしろ、數學にしろ、屹度其研究の基礎となる。或は物を構造すると云ふ觀念を作る根本であるから、決して此れは捨てる事は出來ぬと云ふ事は、理の見易き事であります。然して此本能性を導く方法は如何にすべきかと申しますと先づ子供に玩具を與ふるにも、一旦、壞れても、又元の如くか、或は他の物に組立てらるゝ性質の玩具がよろしい、今現に玩具店などに賣つて居るものには、餘りに價の高き者もあり、又忽ちに壞れて仕方のない物もあり、中には壞れぬ樣に堅固にくつゝいた物もあるが、斯樣な物よりか馬車の玩具ならば、馬は車より取り離す事が出來て、卽ち子供が之れを使用し終れは馬は馬小屋に繫ぐ、車は車小屋に入れる、或は馬丁が馬の世話をする、車の掃除をすると云ふやうに遣る、又使用する時は夫々取り付けて組立てると云ふ樣にすることの出來る者がよろしい、又人形にしても、帶も解ける、衣物も自由に脫がし得る樣にして、置くと、今日はお姉さんの樣な衣物を着せるとか、今日はお客樣が有るから、羽織を着せうといふ樣に、自由に易へる事が出來る。そうすると是に由つて、色々人間生活の有樣を現はす事となつて面白い。

かくの如く、子供をして、物を破壞するを止めんよりは、物を構造さする方面に仕向けねばならぬ。卽ち言ひ換へますれば、消極的でなくて、積極的に遣らねばならぬと云ふ點を「ハリソン」氏が見拔かれたのであります。かくしてこそ彼等は實に人間として、いと清らかで、いと神聖なる人となり得るのであります。卽ち神は少なき材料原素を人間に與へて、そして多くの物を構造せしむる樣に仕向けて居りますれば、人間が物を構造するといふ事は一つの天職でありますから、子供を敎育する上に於ても、充分に愛の眞理を會得して、物を破壞すると云ふ方より、物を組織立てゝゆく方に心を用ひて、以て天賦の心を養ふべきであります。

次は、「フレーベル」氏の兒童敎練の組織に就き消極と積極と云ふ事ですが、今此處に或人が北海道の荒地を開拓して、石を除き、草を去り、立派なる田地となし、正に種を蒔く計りにして、其儘延び〳〵にして置いたら、どーでせう、前に多くの費用を投じて整理せる田地は、再びもとの如く、草茫々と生ひ茂りて、又如何ともする能はざるの有樣となりませう。是れ初めに雜草を去り、石を除きて、美田としたのは、消極的であるが、然し其よき方に導きかけて、是を利用するの方を講ぜず、卽ち積極的に之に種を下す事を等閑に附したから、其間隙より再び種々なる惡しき者が入り來りて、遂に開拓せぬ前と同樣となり、再び巨額の費用と勤勞を要するに立ち來つ

たのであります。斯くの如き實例は自然界に於て多々見る事であります。

又歴史上より論じても、此例はあります。卽ち或國が己の殖民地を開き、土民も從へば五穀も出來る、政事も布かれ、交通も開け、商賣も出來れば、貿易も始まると云ふ好況であつたが、一旦、此國の施設が緩むとか、注意を缺ぐとかした爲めに、再び土民は背く、貿易も止まると云ふの悲境に至りた、例は少くはない、或は或國と他國と交戰して、幸にして其戰に勝つたところが、其戰勝の名譽を喜んだ結果はどうである、此戰の爲め國民の位置は高まつた、名譽はあがつたから、先づ一安心だ、一休みだと、怠心が起る、或は國民一般が傲慢心を起したらどーです、得たる償金は忽にして費され、得たる名譽は何時の間にやら失ふてしまい、外交貿易は捗々しく行かず、國運は日に月に逆退の狀となり、遂には其國をして墮落の境に呻吟せしむるに至らん。斯る例證は古今に照して、明かである。是れ卽ち充分消極的の働はしたのであるが、更に之を積極的に働かざりし結果には過ぎないです、次に默示に就きては少しく宗敎に涉りますで畧します。扨て、今一つ爰によい例がありますで、其れを御話しまして本論の結と致しませう。或處に、十四五歳の息子があつて此息子に惡しき小說に耽る癖があつて、既に一の病的となつて居た、そこで其母が非常に心配して、何か是を矯むる工夫はあるまいかと、考慮の末、或夏の暑休となつて、此息子が歸省する時となつた。そこで母親は本屋に行きて道德的で、美文的で、而も面白いと云ふ事柄の書いてある一冊の書物を求めて、之を歸省の際、汽車の中で讀むやうにと、母の愛を以て贈つた、ところが此息子も、何か小說でも買つて、乘車せうかと思ひし矢先であつたから、大に喜び、遂に汽車中で讀んだが、此簡單なる方案は此息子の惡癖を矯める事が出來て、是より後は小說を讀むのを止めて母が與へた如き道德的の書物に興味を持つやうになつて、結局此息子は幸福なる生涯を迎へたと云ふことであります、

若し此母が積極的に導くの工夫を取らずに、强いて消極的卽ち壓制を以て之を矯めんとの方針を取つたならば、必ず失敗を招いたでありませう。

以上、御話した事で考へますと、あなた方が子供をお取扱ひなさるにも、無闇に壓制するよりか、是等兒童の天性を利用し、彼等の活力を注がしむる水導管をして善良の方面を見つけて、卽ち消極に導くと云ふ事が、最も有効であつて、且つ眞理であると云ふ事は御了解になつたでありませう。それですから、子供に過があつたならば、是は眞に彼等の過であるか、母保姆たる者、自分の導き方の惡しきが爲めではないかと、宜しく己を顧み、己を責むると云ふ方が、大切であつて、眞理であると云ふ事を忘れてはなりませぬ。

第四講　認識の本能卽意志の敎練

今日は認識の本能、卽ち意志の敎練と云ふ事に就きお話を試みませう、扨て今若しも子供に或事を斯くせよと命令すると、子供は之れを聞きて成程是は斯うせねばならぬかと思ひ初めました時、こゝに初めて自由の本能が働きかけた時であつて、此時こそ母敎師たる者の注意を要する時である。此本能からして從順、卽ち彼等の內心から喜びて從ふと云ふ事が出て來る、ところが此喜んですると云ふ事は如何にしたら得らるゝかと云ふ事に就いては昔から議論のある問題で、「パリソン」氏が研究したのも此問題であつた。爰からして人間の道德力は、天賦の本能であるか、敎育の結果であるかと云ふ疑問が起る。是に就いては、古來種々の議論がある。卽ち或は子供に天より與へし特權なりと云ひ、或は正しき敎育より起ると云ひ、或は良心の遺傳に關すると云ひますが、「パリソン」氏自分の意見は無論天より與へし特權でもあり、又遺傳にも關係するが重もに正しき敎育に由りて得らるゝ者であると考へたのである。加ふるに意志の敎練が無くてはならぬ。此敎練が段々と生涯に及ぼす結果であると言ひなした。

そうすれば、其良心を正しく敎育するには、如何との問題が起つて來る。之れに就いての解釋は、二つの方面がある。其一は、卽ち子供をして、形式的に從順ならしむるので、子供に正しき事をなさんことを、强て請求する。其故に彼等は其事柄の如何に拘らず、所謂盲從するのである。さて此結果はどうでせう、子供の

道理力は段々弱くなり、意志の力も弱くなる。然るに此意志てふ者は体力と等しく、教練に由りて發達する者であるにも拘らず、斯る結果を見るは決して宜しき方法ではあるまい。

「ハリソン」氏は言ひました。幼き兒には勿論正しき事は言ふて遣つて、良き習慣を就けねばならぬ。然しながら、之のみで放任して置くと、彼等の身邊には絶えず色々の誘惑が來る。そこで己を保護する意志が必要となる、ところが意志が出て來る迄には、其誘惑が善であるか惡であるかを撰擇することが起つて來る。此撰擇が度重なることに由りて、益々意志は強くなる、故に子供には總ての者を對照して、其事が善か惡か、可か不可かを擇ぶ練習をせねばならぬ。然るに世には只子供が大切と思ふ處から、始終子供の後に付きて、是は斯う、彼はあーと、餘りに世話をやき過ぎる間違つた母もありますが、扨其結果はどーでせう、己れ獨立で、物を撰擇する力に乏しいから、一度社會の中に投げ出された時は、何等の働きもなき、所謂無能の者と成り果つる事は疑はない、故に「ハリソン」氏も言つた、現時の青年を見るに家庭に居る間は如何にも立派な青年であると、思の外、實際社會に出でゝ仕事を遣る時に及んでは社會の潮流に押し流され、遂には墮落生涯に陷る者が多數である。是等は果して、何の結果であらうか、即ち是等の親たる者が、彼れも、是れも、と、一々命令のもとに於て、教育したる罪に外はない、斯る例は世上に澤山ある、或時に私處の練習生の中に、既に年二十を過ぎて居るにも拘らず、衣物を着るにも母、食事をするにも母、彼れも母、是れも母と、凡て母の命令のもとに於てすると云ふやうな方があつたが、是は一見母の命令を重んずるが如く聞えて、よいやうであるが、さて其婦人の仕事の働き振はどーかと云へば、とんと物の役に立たず、其意志の弱い事、實に驚く程であつて、獨立自主とか、自發自動とか云ふ原素は、電氣で分析しても、又幾百倍の顯微鏡にかけても認むる事は出來ぬ、一体我々日本の婦人が意志が薄弱であると云ふ事は、確に一の缺點でありませう、即ち斯うしたら過がありはせぬか、斯うしたら他人の怒に觸れはしないかと云ふて、事毎に逡巡躊躇、毫も勇氣がない、其故私どもの失敗は、大抵意志薄弱と云ふ事が何時も原因となつて居る。

今一つ良心教育に就ての解釋は、人間の意志てふ者は、内部に有る者であるから、決して外部からの命令を受くるの必要はないと云ふ說で、即ち放任主義がよいと云ふのである。此說に由ると子供は未だ道理性の無い時代であつて、自分を制するなどは彼等に於ては不可能の事であるから、總て彼等の自由に任すがよいといふのである。即ち子供に對し、あーそー、あーそー、と何も彼も子供の機嫌を損せざらん事を是れ務むるのですから、全く從順と云ふことさへ知らぬ事となる。斯くては非常に子供の生涯を過ることゝなります。

以上申し上げた事を約めて申しますと、一は形式的、一は抑壓的、一は自由主義で、一は壓制主義で、何れも其極端であつて、何れか其一方に偏してはならぬ。かくては共に健全なる品性を陶冶し得る者でないから、宜しく其中道を歩むべきであります。

次には世の母たり、保姆たる者に、物の判斷力を缺く時は、又子供の從順は得られませぬ。夫に就き爰に一つの例がある、「ハリソン」氏が或母に出遇ひ、あなたの子は何處の幼稚園に行つて居ますかと尋ねたところが、此母が云ふに、一度、或幼稚園に遣つたが、泣いて、泣いて仕方が無いから、遂に遣るのを止めて、今では何處にも遣つて居りませぬと言ふた、此時、「ハリソン」氏は成程、此處である。此處が母自分が判斷力を缺いだ所から、子供の惡癖に負けたのである。かくて一時の癖の爲め其判斷力を失し、之れが爲めに他の教育をも打こわされしは誠に歎はしき事であります。次は子供を從順にせしむるに就きての種類であります。

が先づ一は、子供の願望如何に拘らず、兎に角從順にさすと云ふ事で、即ち遊戯をするに當り子供は汽車がしたい、先生はてふてふをせうと云ふ、そこで子供の願望と、先生の意見と一致しない、それを無理やりに、てふてふをさす、さて其結果はどーでせう、子供を己の意見に從へたが爲めに、どれだけの利益が有つたであらうか、汽車をてふてふに變へたが爲め、どれだけ彼等の活力を減殺したか、計られませぬ。

次は、一時の輕薄心によりて、後來の結果如何に拘らず、兎に角一時を免るが爲め、從順にさすのである。即ち子供がわんぱくで困る、中々無理を云ふ、斯る時に母親が泣かれるのが、つらさに一時其無理を通して

靜かにすると云ふ場合もある、成程、是れは一時從順にさせたかの樣であるが、此子供の我儘は、之れが爲め、一層其度を高め、遂に制し能はざるに至りませう、之れは、全く母親が後來の結果如何を顧みず、一時逃れを遣つたが爲めであります。

次は子供自分から好んで從順になるには、どーかと云ふ事でありますが、是に就いては先づ意志の發達に四つの段階がある事を知らねばならぬ。

卽ち先初めに或動機が起つたならば、輕々しく行はないで、其善惡利害に付き充分に思慮する、其次ぎには思慮した結果に就き、是れをせうか、彼れをせうかとの撰擇が起る。次ぎには其思慮撰擇した後、これがよいと極まつたら之れを決行せうと云ふ心構への狀態、卽ち決斷する。最後に之れを行爲に現はす樣になるで、總て彼等の行爲が、此四段階を經て出で來る樣になつたら、卽ち心から喜んで從順になつたのであります。

扱て、今一つお話します事は、子供を脅迫して無理やりに服從させる、是れは極難かしい、彼等の心にも無いことをあるらしくさせるので、其兒童の神聖を害する事の大なる、敢て私の贅辯を待ちません。又其結果はどーですか、其目先は從順なるが如くありますが、然し彼等の活力は何れの處にか出路を求むるわけであるから、結局己の厭な物は直に捨てるとか、或はやけを起し、所謂自暴自棄の人となり果つる事は、火を視るよりも明かであります。

斯くの如く敎育の方を過り、從順の性格なき處より、其一生涯を過ろ輩は、世間其例に乏しくはありませぬ、そーすると如何にして、眞の從順は得られるかと云ふに、母、保姆、敎師たる者は幼兒に示すに、常に二つの物を示して之れを擇ぶやうに仕向けるがよいと云ふことは、既に前にも申しましたが、卽ち今一人の子供があつて、靜にせねばならぬ時、どーも命令を聞かないと云ふ場合があつたならば、あなたは今靜にしませぬが、靜にせぬならば、室外にお出でなさい、室外に出て仲間の權利を失ふか、靜かにして愉快に權利を保つかと云ふやうに、思考さする、そこで子供は其何れかを擇ぶ心が起る。此時の彼等の心の狀態は自由である、なせなれば斯かる場合には毫も外界の抑制を受けず、單に內心に從ふて居ります。かくして遂に眞の從順が起るのであります。

次には何事も掟正しく遣ると云ふ事も必要であります。なせなれば掟には從はねばならぬと云ふ心の狀態が、眞の從順であるからであります。そこで或敎育家の言ふた如くに、正しき時間は義務を行ふ事を得ると云ひました樣に、時間の如きも正しく守ると云ふ掟を定めて置くがよろしい、米國には食事の前に、必ず顏と手とを洗ふ風習がありますが、處が米國の或母が或時、一度顏と手とを洗はずに食事をした、ところが其後に或日の事に子供が顏や手を洗はずに食事にかゝつた、そこで母がなぜ手を洗ひませぬかと詰問したところが、子供は母さん、あなたも前に一度洗はなんだではないかと云ふて、淸し込んで居たと云ふ例があります。此母の只一度掟を缺ぎしが爲め、遂に子供は掟を敗りて、何とも思はぬ事となるとは。實に歎はしいではありませぬか。

斯くの如く母たる者の不注意で、只一度掟を敗るが爲め、遂には今日迄折角敎育して得たる義務も行れぬことゝなる。斯樣なことは誠に些末の事に似た樣であるが、其弊害や、眞に恐るべきであります。夫故に一つの事に、もやんと規律を立てたら、先づ自己より之れを敗らない樣、模範を示すことが必要である。

それで、今子供に勉强をさすにも、何時から何時迄、何時間は勉强して、其代り何時から何時迄は自由に遊んでよいと云ふ樣に言付けるがよろしい、決して勉强をせよと云ふ樣な、言ひ離しは宜しくありませぬ。結局り斯うやつて前後を連絡して置くと、爰に意志の働が付く、斯樣に意志を働かす樣にせねばならぬと、母の本にも說き明かして居ります。

次には、子供自身も一個の人間であると云ふ事を知らしむる事が大切である。言ひ換ふれば、己れを知ると云ふ事である。卽ち人間は、他の人より認識せられると云ふ事に氣が付いた時程、愉快なものはない。其認識と云ふ事は野蠻時代の人にも在つたものであります。其例證には昔埃及の或墓の壁に戰爭の繪が書いてあ

つた、其繪の中に多くの兵士が列せる處があつて、其最も後方の大將だけ、最も偉大な形に書いてあつたが、此繪を畫いた者は、決して此大將の体を偉大と認めはせぬが、此時の戰爭が、此勇將の如何に偉大なる武力によりて、如何に維持せられしかを認識し且つ人々にも認識させたと云ふことが、此繪に由りて現はされて居ます。私ども、お互でも、或は他人の輿論に入りたいと思ひ、或は他人より何か賞賛の語を得たいとの名譽心と云ふ者は小さな時からあります。それですから子供の行に對しては如何に小さい善行といへども、必ず等閑視せず、之れに適當の賛同を與ふる事、即ち之れを認識すると云ふ事が、又彼等の良心を發達せしむる事となります。然しながら無闇に褒めるのも、又過があると云ふ事に注意せねばならぬ、米國には子供の頭髪の金色なるを非常に愛らしいと云ふて賞美します。ところが、或時、一人の母があつて、一人の子を持つて居た。此子が前に申しました金色の頭髪であつた。或時、此母が人々より餘り認められる〻事に氣がついて、遂に此頭髪を惜しげも無く切つてしまいましたと云ふ美談があります。さて皆さん、なぜ此母は斯かる狂氣じみた事をしたでせうか、此兒が餘りに諸人に認識せられる處から、遂には此兒に傲慢の心を起しはせぬかと云ふ事を氣遣ひて、將來の不幸を救ふためであります。

扱て、以上申し上げました諸點に就き、皆さんの處に於て、充分御研究になりまして、世の母たり、保姆たる者の模範をお示しになつたならば、是に由りてあなた方の品性をも高むる事を得、彼等の品性をも陶冶することを得られませう、それ故先づ母、保姆たる者が、いと靜かな、神の聲の聞ゆる事に、心付きて之れに服從するに至り、從つて彼等兒童をして遂に己の域に迄、到達せしめねばなりませぬ。

第五講　正義の本能卽正不正の罰

今日は、正義の本能卽ち正不正の罰といふ事に就いて、御話致しませう。

初め、「ハリソン」氏が保育の事に就き、御研究なさつて居られました時、或一つの幼稚園の先生が、子供に處罰を加へた事を目擊せられました實驗談があります。此幼稚園は貧民學校に近き程の幼稚園で、此處に入園して居る、兒童は悉く貧民の子弟のみであるから、家庭教育は無論なし、從つて子供の性質は頑固で、中々之れを管理するのは容易の事でなかつたが、ところが此幼稚園に一人の若い先生が之れを治めて居た、そこで「ハリソン」氏は此六ヶ敷子供を如何にして管理して居るかと思ひなさつて、或時、此處へ實況を參觀に行かれました、ところが此時子供は恩物を用ひて、課業をして居ました、即ち極小さな球や立方体や圓柱体の物を絲に通す稽古をして居ましたが、皆々、夫々出來あがつたから、先生の言ふには、今皆さんの作つたのを飾にせうと言ふて、一々取つて飾とした、ところが其中の一人の子供の手藝は、順序正しく出來て居らぬ、そこで此先生が最後に其子供の名を呼んで、あなたのはよく出來て居らぬから、奇麗に出來あがる迄、待ちませうと云つて、再應遣らせましたが、どーしても絲が通らぬ。遂に此子供は怒つて其恩物を臺へ投げ付けた、ところが普通の保姆であつたら、何故投げますかと云ふて、叱る處ですが、此先生は少しも怒らない、又叱りもしない、扱てそれから室外へ出る事となつたで、先生は「ピヤノ」を引きて、子供を整列さしたが、前の子供だけは立たぬ、先生は又、此子供の傍にゆきて、あなたは皆と一所に出ませぬかと言つた、處が其子供が答へるには、たとひ私の體が微塵になつても出ませぬと云ふて、强情張つて立ちませぬ。そこで先生は叱りも、どーも、しないで、それきり、又「ピヤノ」を鳴らして、外の子供を室外に出して別れの歌で、開散させてしまいました。其時、「ハリソン」氏が此後を如何にするであらうかと思ひなさつて、見て居られましたが、彼の子供は矢張り頑として動きませぬ。其から數分間たちて、先生は此子の傍へ行きますと、他の友だちは皆歸りてしまい、あたりは寂として音もなし、爰に於て此子は始めて、自己一人となつて居るといふ事に心づき、少しく悔悟の念を起した、然るに此時先生は其子供の衣物の穢ないにも頓着なく、此子を抱きて、あなたと私は仲よくしませうと云ひましたが、此先生の愛が、此子の精神に徹したか、大に改悛の色が見えたから、先生は汝は明日、今一度、今日の稽古をおしなさい、今日は是れでお歸りなさいと云つて、

歸らしました、「ハリソン」氏は之れを御覽になつて、大に感心せられまして、成程子供の處罰は、斯く遣るべきである。之れが正義に適ふた遣り方であると云ふ事を見拔かれましたと云ふことです。結局り、正、不正の罰に就いては、其子供の行爲は、其性質を現はす者であるから、其行爲に由りて其性質を看破し、其上で罰する事が必要であります、且つ子供を罰する目的はと云はば、正しく罰すると、罰は罪の償ひとなるのみならず、其犯したる罪の結果を現はし、彼等の心中に斯くの如き行に對しては、必ず斯る結果がある。即ち一の掟と云ふ者があるといふ事を感じ、再びかゝる罪を犯す事のなき道を開らくのであります。此故に、子供を罰するには、何時でも罪と罰とは原因結果の關係ある事を知らしめますと。兒童は自制とか、克己とか云ふが如き、高尚なる域に達する事を得るに至りませう。

何となれば、行爲に由りて結果が判る、即ち實に由りて木を知ると、一般で總て行に由りて結果が判る樣になるから、兒童自分の心を用ひて擇ぶから、遂には惡しき行を犯さぬやうになる。然るに行と罰とに應報の連絡が缺げたならば、克己と云ふ大切なる習練をする事が出來ませぬ。是れ正義の道を毀はし、彼等に不幸を與ふると同樣である。そこで罪を犯かすのは、つらいと云ふ事を幼き時から判らして置く事が最も大切であります。

世の放蕩無賴の者の結果は、どーである、此者は或時は面白き生活をしたかも知れぬが、後には乞食よりも猶劣りた境に呻吟するか、或は國家の罪人となるのである。然しながら、是れが親たる者の注意がよくて、即ち前に云ふ己の惡しき行と結果との連絡を知つて居つたならばかくの如き結果はあるまい、即ち其連絡法の幼時敎育が缺げて居つたが爲め、大なる過を招くに至つたのであります。又人が或事をするに當り其結果の如何に拘らず、まあ〳〵斯くやつて置けば、又免かる道もあらんと、一時をごまかすことがあるが、此の自然の處罰はごまかしはきかぬ。即ち自分勝手によい方へ逃るゝ事は出來ませぬ。兎に角、斯かるごまかし的の不幸の考を出すのは、結局り連絡の法則を知らぬ人である、或金言にも風を蒔く者は、暴風を刈り取らねばならぬと云ふ語があるのは、此謂であります。そこで人間の行爲には自然の應報なる、一の法則のあることを知らしむるが、大切であります。其故、子供を罰するには母保姆たる者が、己の專斷で遣るよりか、自然に由る應報の處罰こそ、最も價値があります。且つ之れに由りて公義と云ふ事を知らする事も出來ます。即ち彼等は今の苦痛は、彼の結果である。前の爲すまじき事に反せしが爲めであるから、この掟には抵抗することは出來ぬ。即ち因果應報は覿面であると云ふ事を、子供に知らしむることが出來ます。今子供が火の中に手を差し入れたならば、必ず手を燒くでせう。是れが自然の罰であつて子供は火に對して小言を言ふ事も、不服を訴ふる事も出來ぬ。是れと等しく適當なる應報的の處罰に對しては、毫も不服を言ふ事も出來ぬ。此自然の應報といふ事は、歷史の上にも、社會の上にも、澤山ある事で、今或一國が他國に對し、何か無禮を加ふる時は必ず相當なる應報は此國に向ひます。或は國際間の談判ともなり、甚しきに至りては戰端を開く迄に至らん。又我々お互の間柄にしても、何か他人に對し、不敬の語でもありたる時は、此一言の過が忽ち相互の不和を生ずるに至る事もある。是等は皆自然の應報である。そこで世の母保姆だちは、此處の點に注意して、適應の處罰を施して以て彼等をして罪あらば決して免ることは出來ぬものといふ事を悟らしむることが、何より大切と思ひます。

或時、「ハリソン」氏の幼稚園に於て子供がずつと列びて、箸列べをして居た、其時「ハリソン」氏が一つの箱に恩物を入れて、机上に置いて、皆さん必ず是れに觸れてはならぬと命令して、他の室へいつた、ところが子供はあれにも、さはりたい、是れも試みたいと云ふが彼等の本色ですから、何時の間にやら、先生の命令を忘れてしまい、つひ一人の子供が手を延して、是れに當つた、ところが箱は忽ち顚覆する、中の恩物はあたりへ散亂するといふ狀であつたが、此時、彼子は始めて驚いた、此時「ハリソン」氏は、叱りも怒りもしないで、靜かに言ふには、あなたがした失策であるから、自分で是れを何分間にお拾ひなさいといつて、悉く拾はしました、すると此子供は是れを拾ひつゝある間に應報の關係を悟り、大に改悛の色を作して、一生懸

命に拾ひました。然るに若しも初めに當り、怒りて叱り飛ばすといふやうに遣つたら、どーでせうか、其結果、子供の心と、先生の心とは調和しないが、先生は、別に叱りも、何にも言はないが、子供は一生懸命に拾ふ、是れが應報の罰である。そして此子供が、拾ひ了つて後は、先生と子供とは、調和して居ります。又是れを拾はすのにも、前のやうに遣らないで、叱り飛ばして後に拾へよと命令したならば、子供は之れを拾ふ間に、決して改悛の心は起らないです、なぜなれば先生に叱られると云ふことにのみ、氣を奪はれるからであります。

斯くの如く、自然の罰に由りて施す時は、此結果は彼の行爲より起りし當然の報であるとの考を兒童の心中に起さすに至りますから、世の母、保姆たる者は、其場合を利用して、此處罰は正か、不正かを判斷して、其正なるを採りて施さねばなりませぬ。

今一つの例を申し上げましよー。

或時、或母が我子に向ひ、決して彼の車屋の方へ行かすと、こちらで遊べと、命令して遊びに出した、ところが此子は母の命令を用ひないで、此車屋の方へ行きましたが爲め其白き前垂に車の油がついた、そして此子供が歸つて來た。ところが此母は敎育的の考があつた方であつたから、それでは藥種屋へいつて、あらふ藥を買ふて來よと命令した、直に子供は藥を購つて來た、そこて母親が自分が汚したのであるから、自分で奇麗にせよと命じた、ところが此藥が非常に臭い藥であつたから、子供は弱り入りて、鼻を撮みて、漸く奇麗に油を洗ひ落してしまいました。之れも亦自然の應報的の罰であつて、是より後此子供は、決して車の傍にも寄りつかぬ樣になつたと申します。それを若も、世の間違つた母だちの遣る如くに、子供が命令を用ひないからといつて、押入に投げ入れたり、或は灸をすえるとか、巡査が來るとかいひて、壓制的の罰を行ふのは決して正義なる方法ではない、斯くては子供は自治自制もなく、言ひ換ふれば克己と云ふ性格を缺ぐのみならず、兒童の天性を害するに至りませう。

明治三十六年十月十　日印刷
明治三十六年十月十四日發行

定價金貳拾錢

發行兼編輯者　岡山縣岡山市大字東中山下二番地　定平和佐久
發行所　岡山縣岡山市大字東中山下二番地　私立岡山縣敎育會
印刷者　岡山縣岡山市大字東中山下百二十三番第一地　村本三十郎
印刷所　岡山縣岡山市大字東中山下百二十三番第一地　研精堂
賣捌所　岡山縣岡山市大字西大寺町四十番地　武内彌三郎

不許複製

자4P84

271
37

エ.エル.ハウ嬢 保育法講義録

国立国会図書館

048545-000-1

271-37

保育法講義録（エ・エル・ハウ嬢）

定平 和佐久／編

M36

BEI-0087